神門寺境内廃寺

1985年3月

出雲市教育委員会

神門寺境内廃寺

1985年3月

出雲市教育委員会

第19トレンチ　　基　壇　版　築

はじめに

浄土宗神門寺は、島根医科大学にほど近い出雲市塩冶町字六反に所在し、境内は鬱蒼としています。ここからは奈良時代の特色ある寺院瓦が出土しており、また庫裡の庭には塔の礎石といわれる巨石が残っていることなどから『出雲国風土記』（733年）に記載された新造院の一所に比定する説もあり、古くから注目されていました。

ここは出雲市の中心市街地に近いうえに、比較的静閑な地であるため、近年宅地化が進み市道の整備が計画されていることから、寺域の確認調査を実施しました。

調査は国庫補助を受け、昭和57年度から３か年の継続事業として実施しましたが、このたび総集編として本報告書を発刊するはこびとなりました。

調査の成果は必ずしも満足するものではありませんが、出雲地方における初期の仏教文化を知る好資料が得られたことを喜んでおります。

ここに調査にご指導賜わりました諸先生ならびにご協力いただきました神門寺はじめ関係各位に衷心より厚くお礼申しあげます。

昭和60年３月

出雲市教育委員会

教育長　石　飛　　満

例　言

1.　本書は、出雲市教育委員会が、昭和57年度から昭和59年度の三カ年に、国庫・県費の補助を得て実施した神門寺境内廃寺の寺域確認調査報告である。

2.　調査は、昭和57年８月16日～30日、10月25日～11月10日、昭和58年９月16日～10月22日、昭和59年６月22日～６月30日、７月30日～８月11日、11月26日～12月13日の各期間と若干の補足調査を行なった。

3.　調査体制は次のとおりである。（敬称略）

調査指導者　山本清（島根大学名誉教授）、田中義昭（島根大学法文学部教授）町田章（奈良国立文化財研究所集落研究室長）、松下正司（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所長）、池田満雄（出雲市文化財審議会委員）、森山美具（同委員）、勝部昭（安来一中教諭）、西尾克己（島根県教育庁文化課主事）

調査員　今岡清（出雲市教育委員会社会教育課長）、黒谷達典（出雲二中教諭）、片寄義春（出雲市立今市小学校教諭）、川上稔（出雲市立図書館主事）、大国晴雄（大田市教育委員会社会教育課主事）

調査補助員　遠藤浩己、千賀康弘、長見康弘、角田徳幸、伊田喜浩、伊藤克己、手銭弘明（以上島根大学学生）

事務局　第一次　曽田謙介（社会教育課長）、安井奨（同主事）
第二次　曽田謙介（社会教育課長）、鐘推晴夫（同主事）
第三次　来海弘明（社会教育課文化係長）、片寄治紀（同主事）

4.　調査にあたっては、神門寺（神谷隆秀住職）をはじめ、地元各位の協力があった。

5.　松下正司（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所長）、時枝克安（島根大学理学部助教授）の両氏からは、玉稿を賜わった。

6.　本書の作成は、今岡、勝部、川上、西尾が携り、編集は川上、西尾が行なった。
また、図版作成には池橋幹、井上洋子、田根裕美子、角田徳幸、伊田喜浩、手銭弘明の各氏の協力を得た。

7.　実測図の方位は、調査時における磁北である。

8.　出土遺物は、出雲市教育委員会で保管している。

本　文　目　次

はじめに

例　言

1．位置と環境 …… 1

2．調査の経過 …… 4

3．調査の概要

1－1　境内の北側（1・10・11・14T） …… 7

1－2　境内の西側（6T） …… 14

1－3　境内の南側（2・3・4T）…… 14

1－4　境内の東側（5T）…… 16

1－5　ボーリング調査 …… 17

2－1　弘法堂の北側（7・8・9T） …… 18

2－2　本堂の北側（12・18T）…… 19

2－3　本堂の西側（15・16・17T）…… 23

2－4　土塁（13T） …… 26

2－5　庫裡の北側（19・20・21・22T） …… 28

4．調査に関連して

(1)　神門寺について …… 31

(2)　いわゆる水切瓦の出土遺跡と様相 …… 33

(3)　神門寺境内廃寺の版築粘土層の残留磁気と年代測定への応用について …… 40

5．まとめ …… 45

挿　図　目　次

図１　神門寺境内廃寺と周辺の主要遺跡 …… 1
図２　神門寺境内廃寺周辺のコンター図 …… 3
図３　神門寺周辺の地形測量図 …… 5～6
図４　第１トレンチ出土遺物 …… 7
図５　第１トレンチ遺構実測図 …… 8
図６　第10トレンチ出土遺物 …… 9
図７　第10トレンチ出土の須恵質大壺 …… 10
図８　第11トレンチ出土遺物 …… 11
図９　第11トレンチ遺構実測図 …… 12
図10　第３トレンチ出土遺物 …… 14
図11　第４トレンチ遺構実測図 …… 15
図12　第５トレンチ北壁断面実測図 …… 16
図13　植生推定図 …… 16
図14　地質調査断面図 …… 17
図15　第17トレンチ遺構実測図 …… 18
図16　第12トレンチ出土遺物 …… 19
図17　第18トレンチ出土遺物（土師器） …… 20
図18　第18トレンチ遺構実測図 …… 21
図19　第18トレンチ出土遺物（瓦） …… 22
図20　第16トレンチ遺構実測図 …… 24
図21　第16トレンチ出土遺物 …… 25
図22　第13トレンチ東壁断面実測図 …… 26
図23　第13トレンチ出土骨蔵器 …… 27
図24　第19・20・21・22トレンチ遺構実測図 …… 29～30
図25　土塁西の石塔 …… 32
図26　水切瓦集成図 …… 37～38
図27　第19トレンチ版築層と試料採取位置 …… 41
図28　第19・21トレンチ版築層残留磁気強度分布 …… 41
図29　第19トレンチ残留磁気の方向分布 …… 42
図30　第21トレンチ底部残留磁気方向分布 …… 42
図31　西南日本の地磁気永年変化と神門寺境内廃寺粘土質層の残留磁気平均方向 …… 43

図　版　目　次

図版Ⅰ　神門寺の航空写真（西から）
　　神門寺（南から）
図版Ⅱ　第１トレンチ（北から）
　　第10トレンチ（東から）
図版Ⅲ　第３トレンチ（西から）
　　第５トレンチ断面（南から）
図版Ⅳ　第16トレンチ（南から）
　　第18トレンチ（東から）
図版Ⅴ　礎石と19トレンチ（南から）
　　版築状況（19トレンチ北壁）
　　版築状況（19トレンチ東壁）
図版Ⅵ　第12トレンチ瓦溜り
　　神門寺之絵図
図版Ⅶ　表採瓦（軒丸瓦・鬼瓦）
　　表採瓦（軒丸瓦）
　　発掘調査で出土した軒丸瓦
図版Ⅷ　丸瓦・鴟尾（？）・鬼瓦
　　平瓦
図版Ⅸ　第３トレンチ出土　砥石・弥生式土器
　　第11トレンチ出土　縄文式土器
　　第18トレンチ出土　土師器

1.　位置と環境

南北を山地に挟まれ、東西に細長い出雲平野は、山陰随一の沃野である。平野の形成は神戸川と斐伊川の二大河川の沖積作用と、海の営力による作用によっているが、現在見られるような景観は河川の沖積作用によるところが大きい。

しかし、出雲平野が現在見られるような景観を呈するようになったのは、斐伊川が完全に東遷する近世になってからである。奈良時代に編纂された『出雲国風土記』によると、平野の西部には、「神門水海（かむどのみずうみ）」が広い水域を有していたし、また、東部には「入海」が現在の平田市街地の辺りまで広がっていたことが知られる。

出雲平野を地形的に大まかに分類すると、沖積低地、自然堤防、扇状地、砂丘に区分できる。砂丘は外海に面した平野の最西端に位置し、扇状地は北山山塊の南山麓に主として点綴している。また、自然堤防は神戸川と斐伊川によって形成され、沖積低地よりも１～

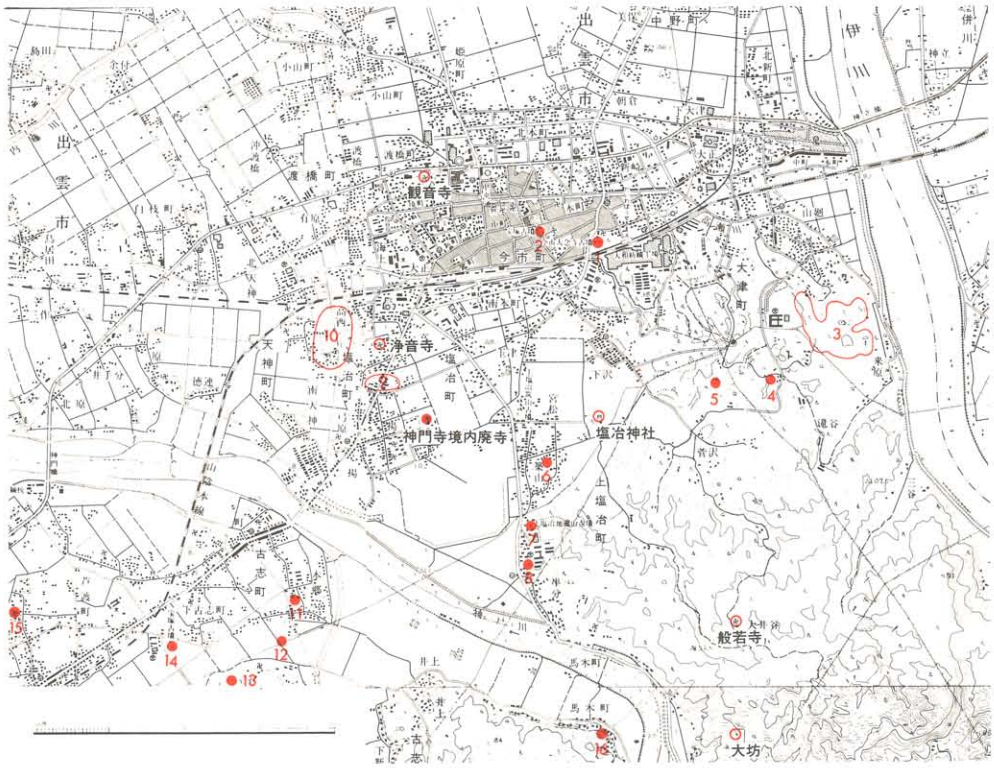


図１　神門寺境内廃寺と周辺の主要遺跡

１.大念寺古墳　２.塚山古墳　３.西谷墳墓群　４.長者原廃寺　５.菅沢古墓　６.上塩冶築山古墳
７.地蔵山古墳　８.半分古墳　９.高西遺跡　10.天神遺跡　11.大梶古墳　12.古志遺跡
13.妙蓮寺山古墳　14.宝塚古墳　15.知井宮多聞院遺跡　16.小坂古墳

2ｍ高くなっている。

神門寺は、出雲市街地の南方、2㎞に位置している。天平3年に行基が開山したと伝えられる古刹であり、弘法大師がこの寺で「いろは歌」を詠んだことに因んで「いろは寺」の別名もある。すぐ南には、島根医科大学が偉容を誇っており、さらにその南には、神戸川が東から西に流れている。

出雲平野での遺跡の初現は、縄文時代早期末の菱根遺跡であるが、縄文時代も晩期になると、沖積低地の自然堤防上に遺跡が散見できる。神門寺付近と矢野遺跡では土器細片が少量認められている。縄文海進に続く海退によって汀線が西に大きく後退したことが契機になっているであろうが、弥生時代には遺跡の数はさらにふえ、矢野遺跡のほかにも天神遺跡、下古志田畑遺跡、知井宮多聞院遺跡などの大集落が自然堤防上に点在してくる。それらは、『出雲国風土記』に記載された「神門水海」の原景観ともいえる「入海」をとりまくようにして分布する。

古墳時代になると、「入海」の湾入部が塞がれて「潟湖」に変ぼうしていくと考えられるが、古墳時代中期になると集落の廃絶が目立ってくる。矢野遺跡、多聞院遺跡などの弥生時代の中心的集落が消えていくなかで、天神遺跡や宮松遺跡などの旧自然堤防でも高位にあるものが継続していく。これは、この時期に海水準が相対的に上昇したため河川の氾濫を促し、より安全な土地を求めて集落が移動したものと推定できる。

弥生時代末期から古墳時代初期にかけては、斐伊川左岸に西谷墳墓群が築成され注目されるが、出雲平野の古墳というと、全国的にもよく知られている壮大な横穴式石室を備えた後期古墳が卓越している。近年、最古の版築手法による墳丘築成が発見されたこと[註(1)]で注目されている大念寺古墳や、X線透視によって花形文様が浮かびあがったこと[註(2)]で話題をあつめた上塩冶築山古墳を筆頭にして、上塩冶地蔵山古墳、半分古墳、小坂古墳、放レ山古墳、妙蓮寺山古墳、宝塚古墳などの国・県指定史跡となっている古墳が平野の南山麓に築かれている。また、横穴も、上塩冶町から東神西にいたる平野の南部の山腹に数多く開口している。これらの古墳や横穴が示すように、かなりの集団が住みつき平野を開拓していたと思われるにもかかわらず、遺跡の存在はあまり知られていない。

奈良時代の遺跡も数は多くはないが存在し、なかでも、天神遺跡では、奈良時代から中世にいたる掘立柱群が複合して検出されたほか、墨書土器や緑釉陶器も出土しており、神門郡家に比定する説もある。また、神門寺境内廃寺からはいわゆる水切瓦をはじめとする古瓦類が多量に発見され、礎石の一部も存在する。今年度の調査では礎石下に版築した基壇が検出され、はじめて寺院遺構の一端が明らかになった。そのほか、宮松遺跡では、道

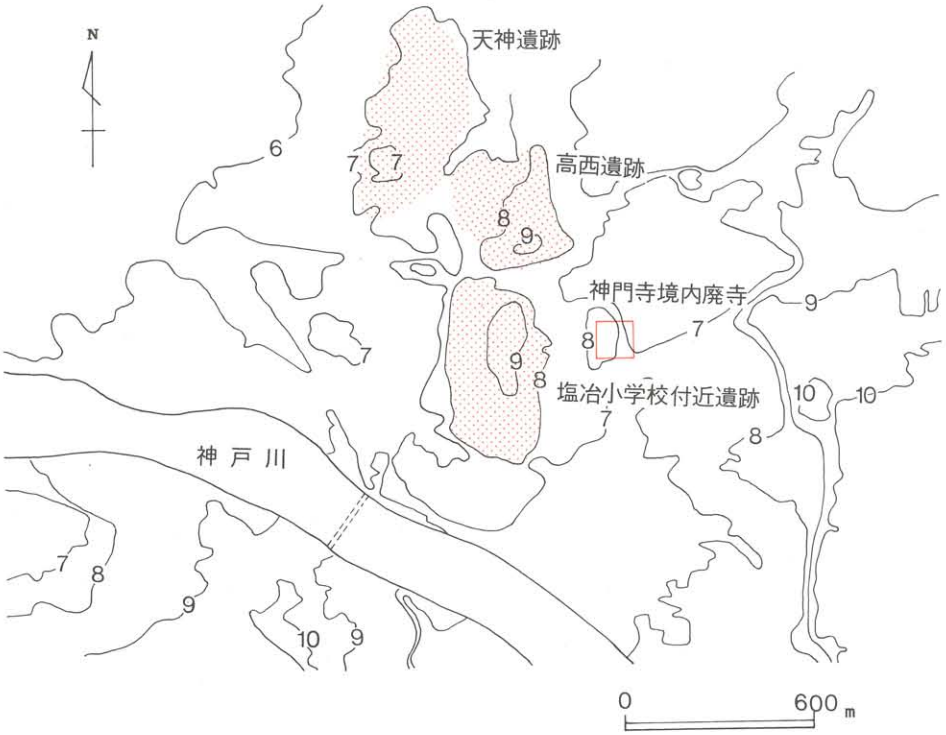


図2　コンター図

路新設工事の際に多量の須恵器類が確認されている。また、古代寺院では、長者原廃寺、大寺廃寺があり、古志遺跡では、古瓦などが出土している。

中世になると、塩冶の地に出雲国守護所が設けられ、出雲国守護塩冶頼泰、貞清、高貞の三代にわたり、出雲国の政治の中心となった。しかし、高貞の死後は、政治の中心が出雲国東部の富田郷に移った。中世の城としては、半分城跡や向山城跡、浄土寺山城跡などがあるが、郭や土塁、堀切などの諸施設は認められているものの、全体が明らかになったものはない。また、塩冶氏にかかわる社寺としては、観音寺、浄音寺、塩冶神社がよく知られている。

註(1)　出雲市教育委員会『史跡今市大念寺古墳保存修理工事報告書』（1984）

註(2)　山陰中央新報　昭和59年２月26日号ほか各紙

2. 調査の経過

市内塩冶町字六反に所在する神門寺の境内やその附近から、古代の寺院瓦が出土することは古くから知られていた。また庫裡の裏庭には当時のものと思われる礎石があり、遺構は不明であるが当地方における古代の仏教文化を知る貴重な遺跡として、市教育委員会は昭和35年12月「神門寺境内廃寺跡」を指定している。

この遺跡近くに島根医科大学が開校し、神門寺東側の区域も市道の整備が予定されることから寺域確認のための発掘調査を行なった。

調査は昭和57年度から３カ年間国庫補助事業として実施した。初年度は約36,000m²の地形測量を行うとともに、境内北側土塁の外に第１トレンチ、参道の西に第２トレンチ、東に第３・４トレンチを設け発掘調査を行った。次に参道から約100ｍ東の水田内に第５トレンチを設けた。ここには江戸時代まで神門寺の濠があったという古老の話をもとに、同寺蔵古絵図に見える濠を確認するためである。幸運にも大溝を検出することができ絵図の如く大規模な寺域を予想した。

昭和58年度は地形測量調査区域をさらに20,000m²拡大するとともに、調査は大溝の延長を確認するため境内北東のコーナー附近と思われる所に10点、南西の終点附近と思われる所に10点のボーリングを行い、オールコアを採取（業者委託）して見たが、大溝の土層らしきものは検出できなかった。

発掘調査は、回廊遺構等の検出を目的として境内南西部に４カ所（６Ｔ～９Ｔ）にトレンチを設け発掘したが検出できなかった。次に北側土塁外の畑に第10、11トレンチを設け発掘したが、寺院遺構は検出できなかった。以上のことから、古代寺院の寺域は予想より狭くなってきた。第12トレンチは本堂裏に設けたが、建物遺構は検出できなかった。

昭和59年度は、先ず土塁の築造時期を明らかにしようと、北側の土塁にほぼ直角に第13トレンチを設け発掘調査した。この結果土塁は江戸時代に築造されたことがわかった。また、北東のボーリング地点で認められた溝を追跡するため土塁のすぐ北側に第14トレンチを設けたが、発見できなかった。

続いて神門寺のご協力を得て本堂の西側、北側附近にトレンチ（15Ｔ～18Ｔ）を設けた。地盤は固く締っていて発掘に時間を要したが、回廊や基壇などの遺構は検出できなかった。次に、庫裡の庭園の中に残存する礎石のすぐ南を発掘したところ、固く版築された基壇を発見することができ、古代寺院の遺構の一端が明らかになった。

土塁
池
池
神門寺本堂
庫裡
観音堂
弘法堂
池
伝塩冶判官貞首塚
鐘楼
仁王門
ボーリング調査地点
ボーリング調査地点
市道塩冶145号線
市道塩冶1号線
0
100m

3.　調査の概要

1－1　境内の北側（1、10、11、14T）

第1トレンチ

境内の裏手に位置する土塁の北側に幅3ｍ、長さ12ｍのトレンチを設定した。地目は畑地で、表採遺物が多かったことからみて、遺構の存在を期待してトレンチを設けた。地山面までは表土から80cmで、褐色土層と茶褐色砂質土層から瓦類等の多量の遺物が出土した。

遺構としては、溝状遺構のほか、ピット14、瓦溜1などを検出した。また、トレンチの北端からは土師質土器を焼く窯跡[註(1)]と考えられる厚さ3～4cmで内部空胴の素焼き状の遺構があり、内部から土師質土器1個体が出土した。溝状遺構からは土製支脚とカマドの破片が出土しており、西に広がれば住居址になる可能性もあるが、現状では即断し難い。

遺物としては、瓦類のほかに土師器、須恵器、土製支脚などがある。瓦類では、平瓦と丸瓦が多い。平瓦は、表面に格子目や縄目の叩きがあり、内面には細かい布目痕が残っている。丸瓦には、行基式と玉縁付式のものがある。また、鬼瓦と軒丸瓦の小破片が各1片確認されている。須恵器では、小形の坏が形が見えるもので、口径11cm、器高2.6cmで、体部はヨコナデ、外部底部はヘラ削りを施している。土師器は糸切り底の坏のほか甕がある。また、石器では石斧が一点出土している。

註(1)　北九州の一升水遺跡から同種の遺構が検出されている。

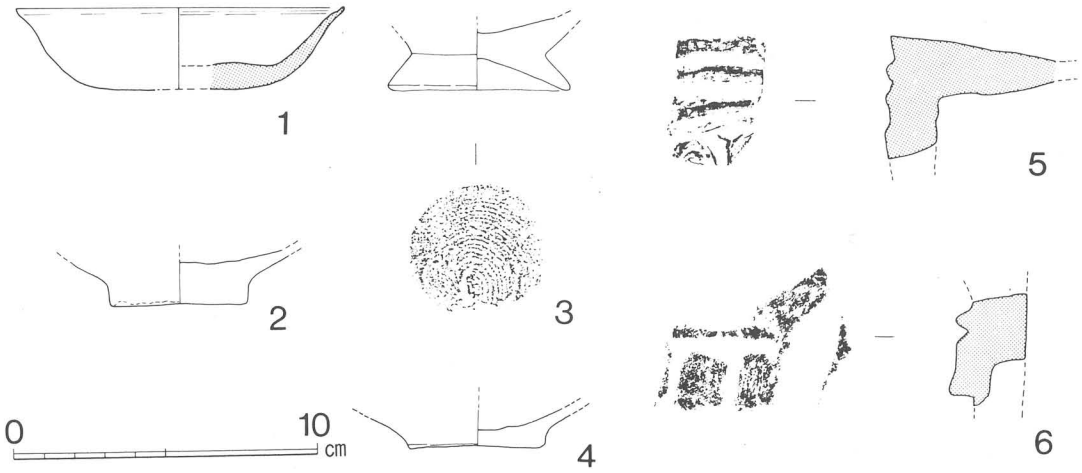


図4　第1トレンチ出土遺物

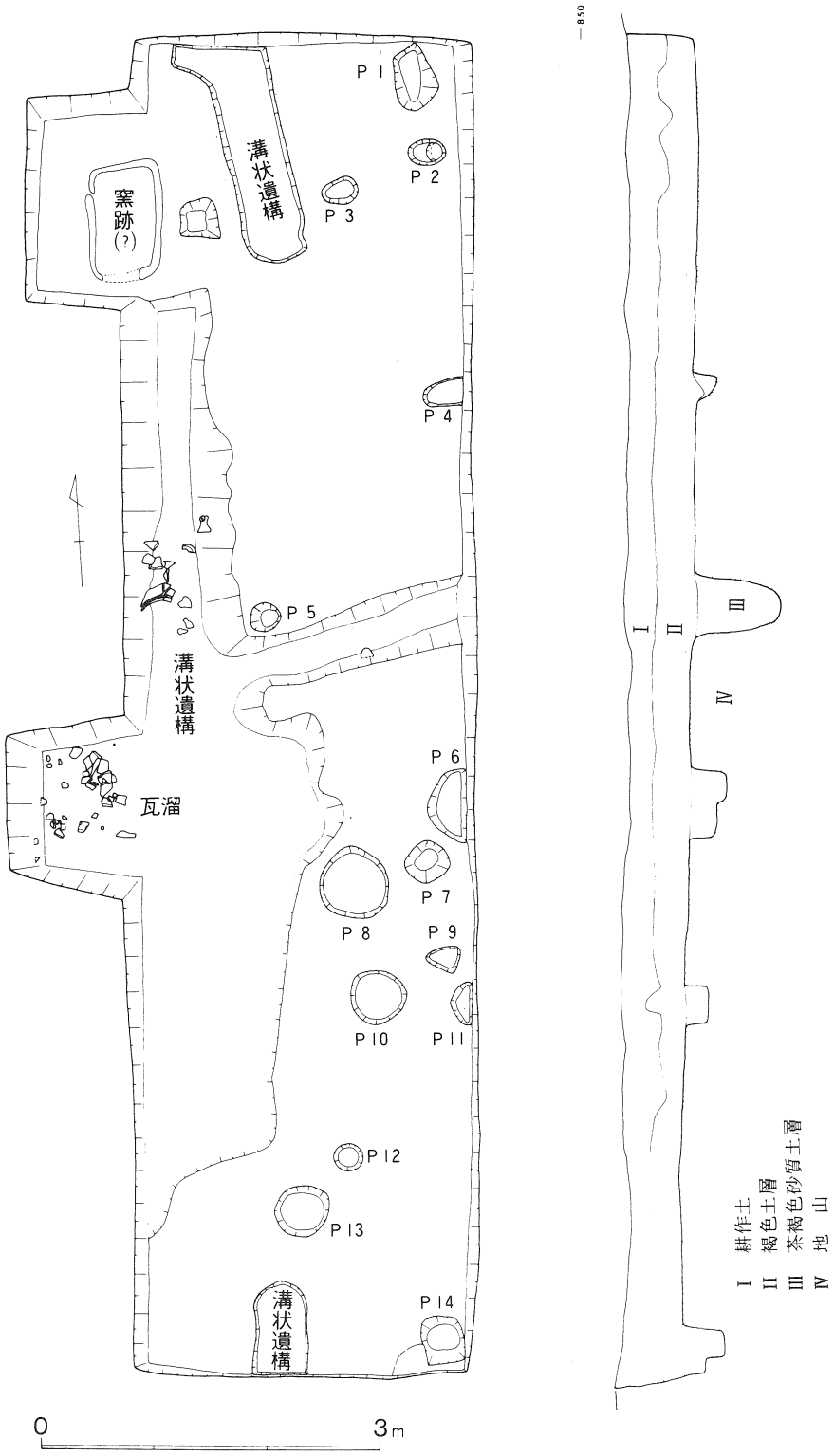


図5　第1トレンチ遺構実測図

第10トレンチ

第一次調査の第１トレンチの西10ｍの位置に、幅２ｍ、長さ7.5ｍの南北に細長いトレンチを設定した。層序のうち、明褐色土層と褐色土層中に、瓦類と土師質土器を多量に含んでいる。遺構としては、中世の火葬墓１、石塔群１、瓦溜１、ピット７を検出した。

火葬墓は口径35cm、器高51.5cmの須恵質の大壺で、自然石で方形に囲む石組を伴っている。壺の上半部は、耕作のため欠損していたが、内部には骨の細片が多量に遺存していた。

石塔群は、火葬墓のすぐ北に接した位置にあり、五輪塔と宝筐印塔の各部分がある。知見の限りでは、４基以上の石塔が存在していたと考えられる。石材は凝灰質砂岩であるが梵字や銘文は認められない。

瓦溜は、トレンチの南端部から検出された。散布範囲は、東西1.5ｍ、南北１ｍで、暗褐色土層上部である。瓦の種類は、平瓦が多く、丸瓦も認められる。

ピットは、径20～70cm、深さ30cmで浅いものが多い。大小７個が検出されたが、調査面積が狭いため、建物跡に伴うものかどうかは定かではない。

出土遺物としては、多量の瓦片のほか、須恵器、土師器、土師質土器、土製支脚等がある。

瓦には、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、堤瓦がある。軒丸瓦は、復元径約15cmの八葉複弁蓮花文軒丸瓦の破片である。内区は多数の蓮子をもつ中房と複弁があり、外区は重弧文で弧文の断面は三角状を呈する。周縁は平縁で、ヘラで表面をていねいに仕上げている。瓦当面と

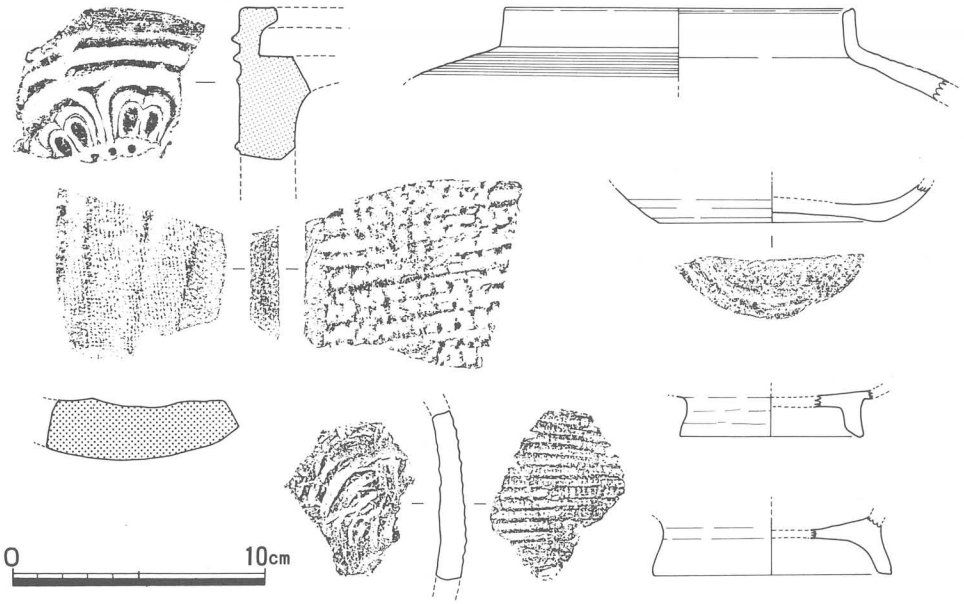


図６　　第10トレンチ出土遺物

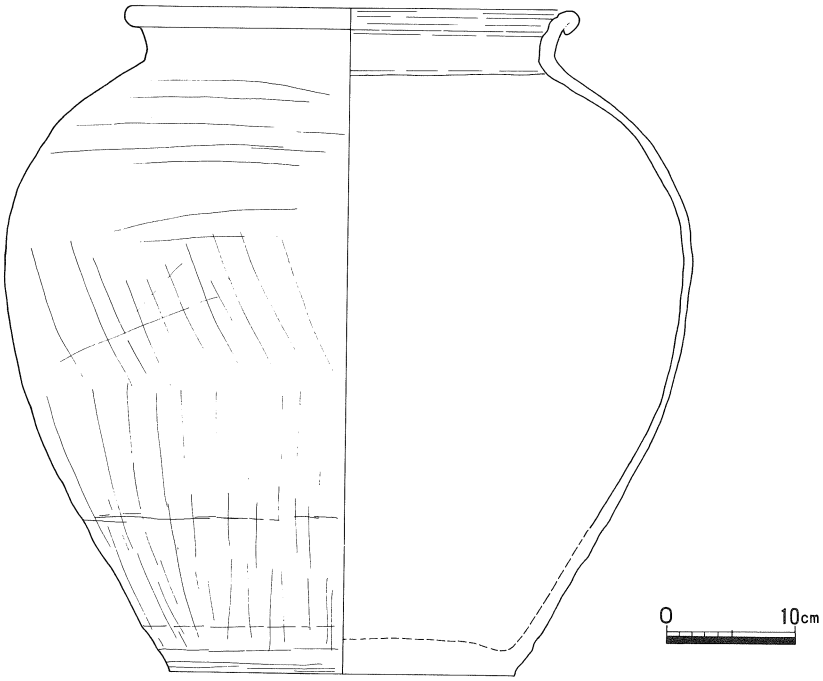


図7　　第10トレンチ出土の須恵質大壺

モヤは印籠つぎであるが、剝離している部分がある。丸瓦は、無段式で、長さ46cm、厚さ3cmのものがあり、凹面には細かい布目があり、凸面はヘラ成形のあと布目が施されている。端面はヘラで面取りされている。模骨痕ははっきりしない。平瓦は、模骨を用い、布筒をかぶせて作った桶巻き作りのもので、凹面に細かい布目、凸面は格子文の押型具による叩き痕がある。側面は、三方をヘラで成形している。堤瓦は、凹面を細かい布目、凸面は格子文の押型具による成形痕がある。側面は厚さ3cmの半分の深さに切り込みを入れ、乾燥後に割った痕がある。

須恵器では、自然釉のかかった短頸壺があるが、口縁部のみの破片である。甕片は、内面は円心円、外面に自然釉がかかったものである。坏は、底部のみで、ヘラおこしである。このほか、窯体内で焼台に使ったと思われる9cm大の塊に、輪状つまみがつくと思われる須恵器蓋片が溶着したものがあり、瓦の時期を考えるうえで示唆を与えるものである。

土師器には、甕と坏の小片があるが、焼成は軟かい。

土師質土器は、底部が回転糸切りの皿と、高台のつく坏がいくつかある。高台付坏の坏部はロクロびきで、底部は回転糸切りである。色は赤褐色ないしは灰褐色を呈する。

第11トレンチ

土塁の北側にある畑地に設定した東西４ｍ、南北11ｍのトレンチで、第１トレンチの東20ｍに位置する。

調査の結果、トレンチの南半分は、北半分よりも40cm程度地山が高く、表層から僅か10cmで非常に堅緻な土層に達した。遺構としては、数個のピットと土壙が検出された。

ピットは、径10cmから径70cmのもので、深さは浅く、最も深いものでも40cm程度である。Ｐ２、Ｐ３、Ｐ４は、約２ｍ間隔で一列にならぶが、発掘区域がせまいために、建物に結びつくかどうかは現状では判断しがたい。土壙は60×130cmの大きさで、深さは30cmであるが、二個のピットが重なった可能性もある。これらの遺構のある平坦面は、第１・10・14トレンチでは見当らず、極めて局地的なものである可能性が強い。平坦面の端部に石や瓦などの施設もなく、人工的に加工された形跡も見当らない。

下段は、他の土塁北側のトレンチとほぼ同じ深さに地山がある。遺構としては、溝状遺

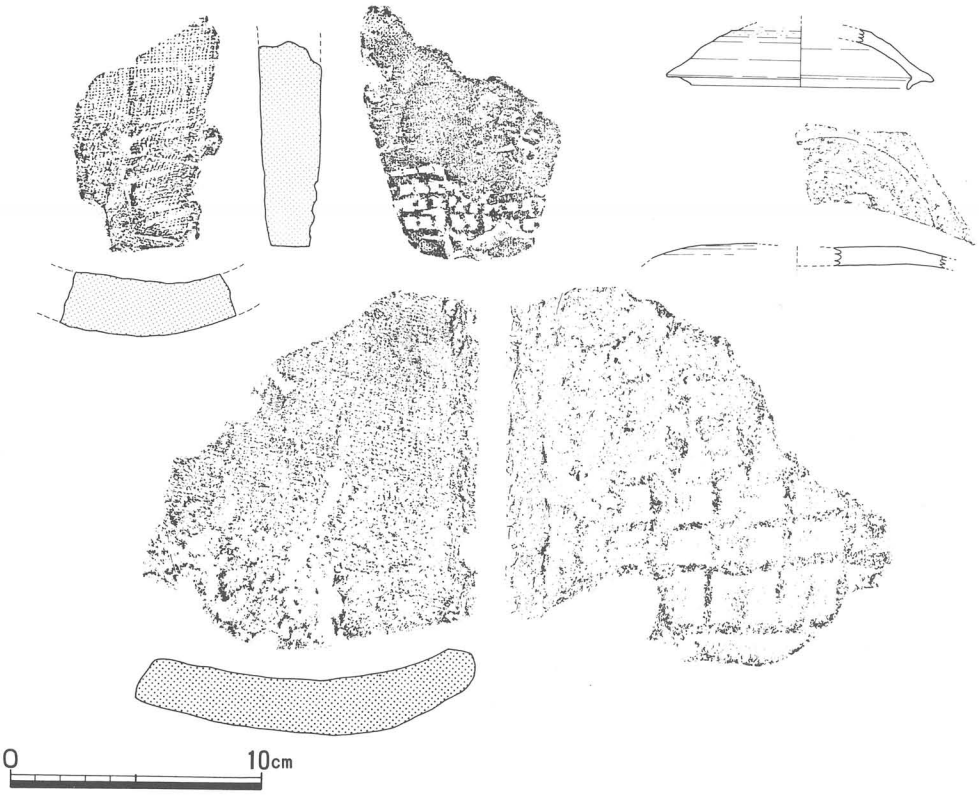


図８　第11トレンチ出土遺物

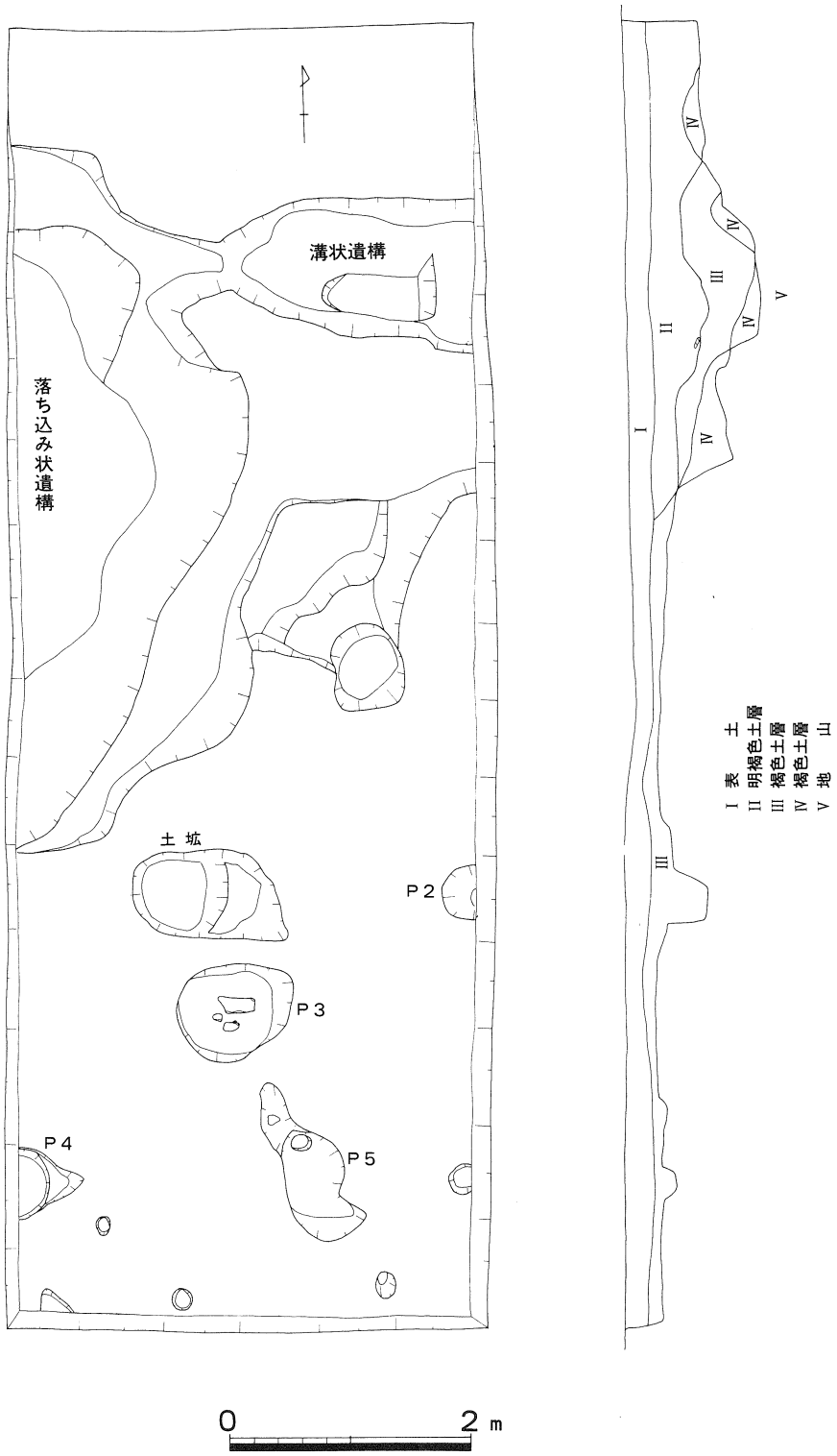


図９　　第11トレンチ遺構実測図

構と落ち込み状遺構が検出された。

落ち込み状遺構は、径が少なくとも５ｍ以上はあり、深さは80cm以上である。最下部には、粘質土層が５～10cmの厚さで堆積しており、滞水していたことが推定できる。さらに西側まで広がっているが、第10トレンチでは見当らなかったので、小さな落ち込み状の遺構ではないかと考えられる。

溝状遺構は、落ち込み状遺構から東に伸びている。幅１ｍ、深さは40cm程度であるが、遺構の性格は不明である。

出土遺物には、瓦のほか、須恵器、青磁、白磁、土師質土器、陶質土器、備前焼、角釘などがある。

瓦は、平瓦の破片が殆んどである。凸面は格子目の押型具で叩かれ、凹面は布筒の細かい布目痕があり、模骨痕も残っている。焼成は軟かく、厚さ1.5cm程度の薄いものもある。端面は、面取りされている。丸瓦は、有段式のものがあり、凹面には布筒の布目が残っている。

須恵器は、いずれも蓋の破片である。焼成は良好で灰黒色を呈し、天井部にヘラケズリが施されている。

備前焼の甕、土師質土器の皿、青磁の盤、白磁、陶質土器は、いずれも小破片である。

第14トレンチ

境内を囲繞する土塁に接した北側に設定した南北９ｍ、東西２ｍのトレンチである。このトレンチは、段状遺構が認められた第11トレンチの南東にあたり、その遺構の存在と性格を把えることと、北東コーナー付近のボーリング（No.９試錐地点）でその可能性が指摘された溝状遺構が、はたして土塁にそってその北側を繞っているかどうかを確かめることを目的としている。

発掘の結果、遺構としては、大小６個のピットが確認された。ピットは、径20～100cmで深さは25～55cmである。Ｐ２、Ｐ４、Ｐ５の３個のピットが２ｍ20cm間隔でならぶが、トレンチ外にかかるため、詳細は不明である。ピット以外には、遺構らしきものは検出できなかった。

トレンチの層序は、上から表土、黒褐色土、褐色土、黄褐色土（地山）で、第13トレンチで確認された段状遺構が検出できなかったことからみて、この遺構は極めて局地的な可能性が強い。また、ボーリング調査で認められた溝状遺構は、全く検出できなかったため、溝状遺構が土塁の北側を繞ることは否定的である。遺物としては、土師質土器、須恵器、瓦（丸瓦・平瓦）のほか、古銭（○徳元宝）も１枚出土した。

1－2　境内の西側（6T）

神門寺の南西にある荒無地（もと水田）に、幅3mで長さ18mのトレンチと、幅4mで長さ9mのトレンチをL字状に設定した。第一次調査をふまえた寺院想定で、寺の主要な伽藍が営まれた区域の内郭線の南西端と推定されたが、調査の結果、遺構は確認できず、また遺物も須恵器が1片出土しただけであった。

1－3　境内の南側（2・3・4T）

第2トレンチ

仁王門の西側に隣接する畑地に、幅2m、長さ12mのトレンチを東西に設定した。遺構としては、ほぼ直線状にならぶ3個のピットを検出した。ピット列の方向は、東西よりも少しずれている。径は60～100cmで深さは40cmの二段ピットであるが、時期や性格は現状では判断できない。

遺物としては、瓦と少量の土師器がある。

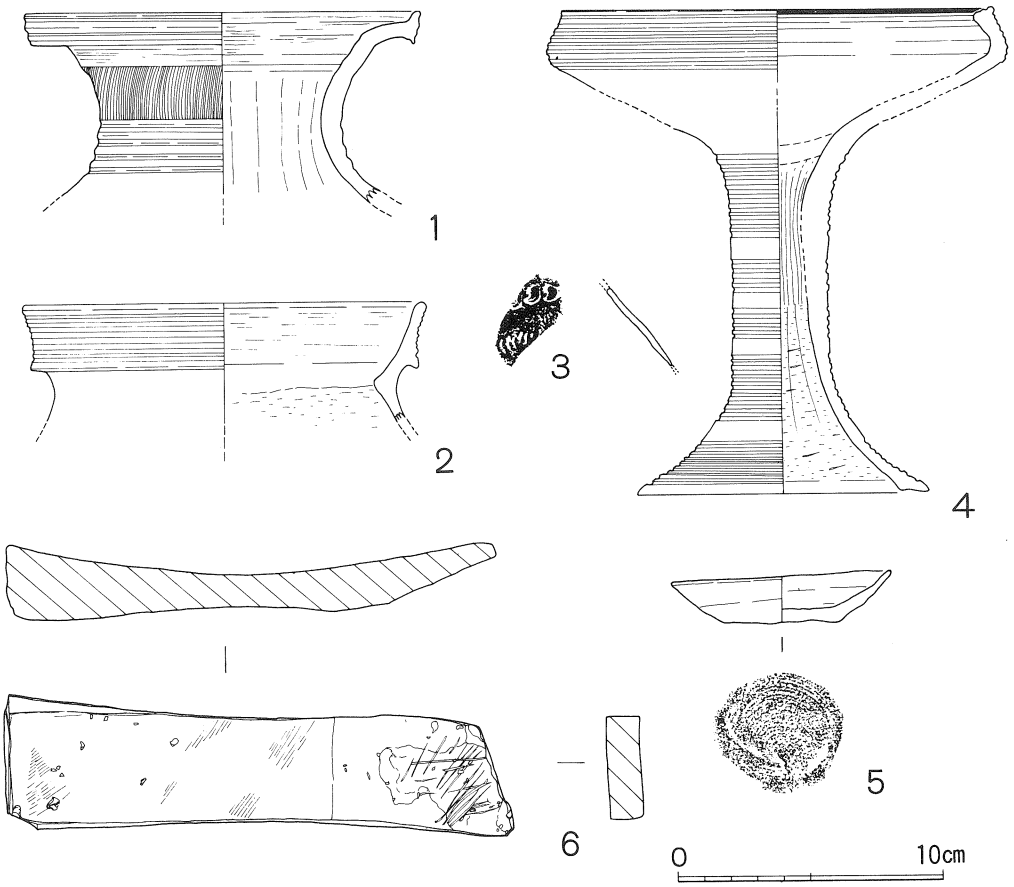


図10　第3トレンチ出土遺物実測図

第３トレンチ

第２・４トレンチと同じく、古代寺院の南への広がりを確認するために設定したトレンチである。神門寺境内から南へ伸びる参道の東側畑地に、４×４ｍのトレンチを設定した。層序は、表土、褐色土、茶褐色土であり、地山までは80cmを測る。

遺構としては、石列と土壙が検出された。石列は、トレンチの北西から南西に人頭大の石数個を列状に配しているが、その性格は不明である。土壙は、50×160cmの東西に長い深さ10cmの浅い遺構である。内部から土器が出土していないので、時期や性格は不明である。遺物としては、弥生時代後期の壺と高坏、中・近世の陶磁器、土師質土器のほか、砥石が石列付近から出土した。また、注目すべき遺物としては、弥生式土器の破片に押圧されたスタンプ文土器がある。文様は勾玉のようなものであり、凹面は赤色塗彩されている。

なお、瓦類は、全く出土しなかった。

第４トレンチ

第３トレンチのすぐ南の畑地に、南北 1.5ｍ、東西８ｍのトレンチを設定した。第４トレンチは、第３トレンチの表土にくらべて約１ｍ低くなっており、寺域との何らかの関連があるかどうかを確認する意味で設定したものである。

遺構としては、トレンチの東寄りに、推定径４ｍ、深さ60cmの大形の土坑を検出した。土壙の内部からは、弥生式土器の底部破片が１片だけ出土した。遺構の性格は不明である。

土坑以外の遺物としては、弥生式土器と中・近世の陶磁器の破片が少量出土した。瓦は、第３トレンチと同じく、出土していない。

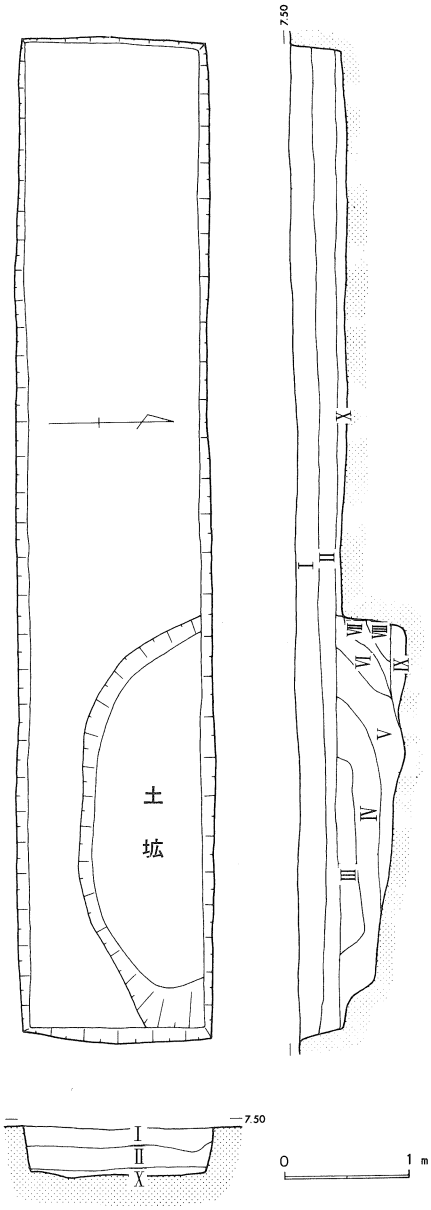


図11　第４トレンチ実測図

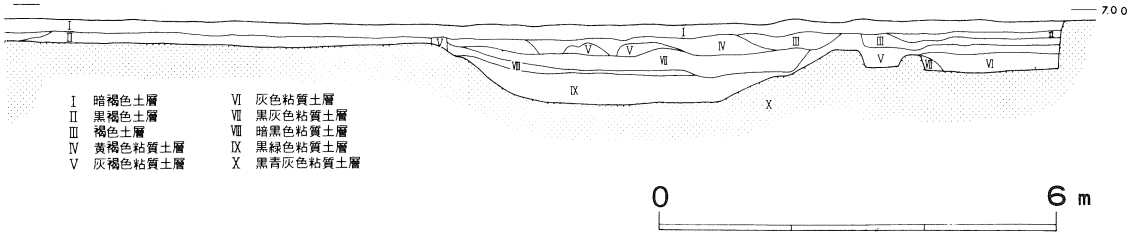


図12　第５トレンチ北壁断面実測図

１－４　境内の東側（５Ｔ）

神門寺所蔵の古絵図にみられる濠があったと推定できる神門寺東方の水田に、南北２ｍ、東西25ｍの細長いトレンチを設定した。

神門寺のかつての境界が、小さい溝とそれに沿った小径であったといわれ、第一次調査で１ｍ幅の溝と１ｍ程度の幅員をもつ小径が確認された。また、古絵図にある濠の遺構と考えられる大溝もその下方に存在した。規模は、幅６ｍ、深さ１ｍを測り、内部には粘質土層が堆積し、水がたたえられていたらしい。また、最下底部からは、松葉や落葉樹の下葉などが多量に堆積していた。さらに、この大溝の西側からは、大きな松の株痕が認められ、古絵図にあるように、溝に沿った松並木も存在していたことが実証された。

この大溝の内部からは出土遺物がないため、時期の比定が難しく、どこまで遡り得るかは断定できない。

なお、大溝中の出土植物は、森山美具氏によれば、スギの球果、シイの類、カヤツリグサの類、ヒシの実などで、植生としては、松、シイの高木層とヒサカキ、ナラガシワ、タケ、ササの低木・草木層があり、堀の水辺にカヤツリグサ、水面にヒシが浮いていたと推定されている。

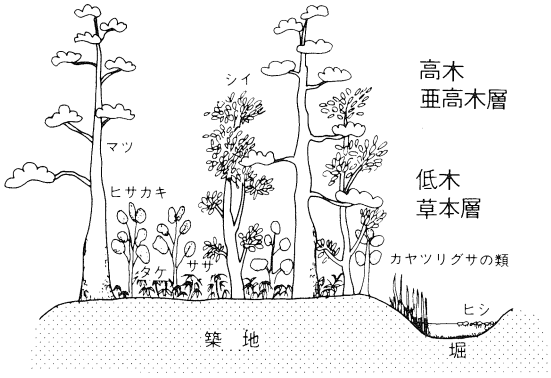


図13　植生推定図

1－5　ボーリング調査

第一次調査において、神門寺所蔵の神門寺之絵図にみられる濠にあたると考えられる幅６ｍの大きな溝状遺構が検出された。そのため、境内の北東と西に各10地点のボーリングを実施し、この大きな溝状遺構の平面的な広がりの確認作業を、業者委託によって実施した。

試錐は、東邦Ｄ－１型試錐機を用い、ロータリーボーリング工法による地表面下のオールコア採取を実施した。各ポイントは2.5ｍ間隔とし、２ｍの試錐深度で20ケ所の延40ｍを行なった。

試錐の結果、第一次調査の第５トレンチにみられた木の葉などの腐植物を含む明確な黒色粘質土層は確認できなかったが、境内の北東（神門寺之絵図からすると、北東のコーナーから西に少し折れたところにあたる）のNo.９試錐地点において、腐蝕物や炭化物を含む暗灰黒色砂質シルトとシルト質細砂の互層が近似の堆積層として溝状遺構が埋もれている可能性が指摘された。しかし、境内の西の試錐調査では、溝状遺構らしきものは全く確認できなかった。

現在、ボーリングコアは、出雲市教育委員会で保管している。

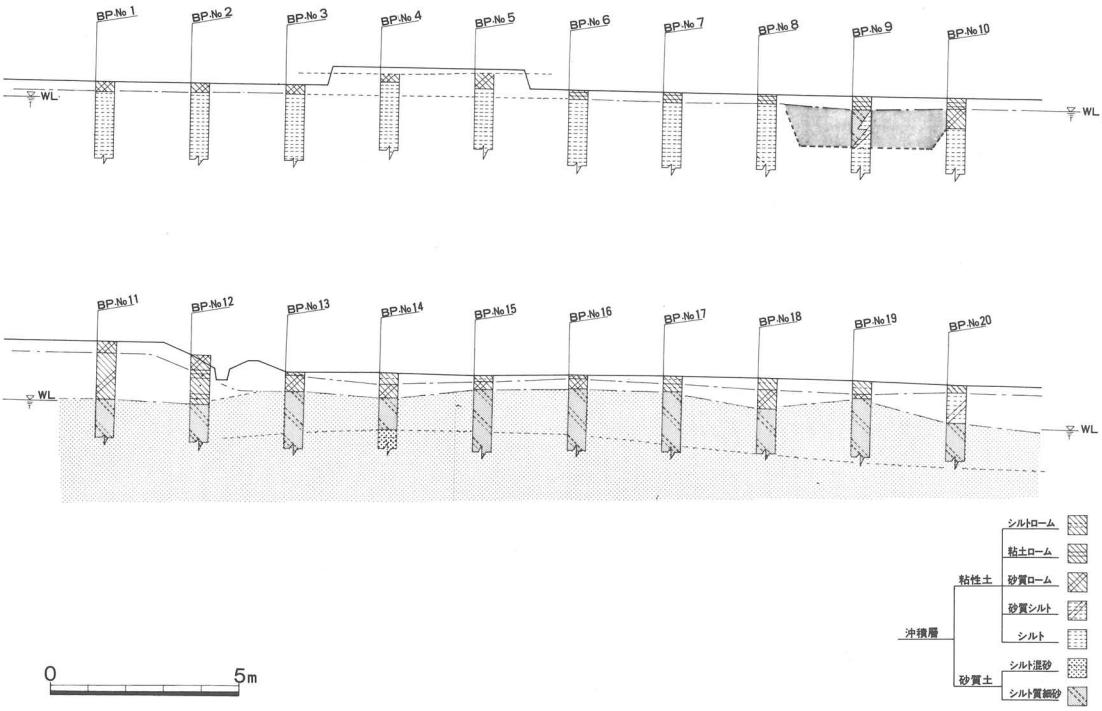


図14　地質調査断面図

2－1　弘法堂の北側（7・8・9T）

神門寺境内の南東部にある弘法堂と観音堂の中間の標高8.5mの空地に、立木を避けて第7トレンチ（南北1.5m、東西6m）、第8トレンチ（南北1.5m、東西5m）、第9トレンチ（南北1.5m、東西5m）の各トレンチを階段状に設定した。

この一群のトレンチは、土塁の内側あたりに回廊があることを想定して、それの確認のために設定したものである。

第7トレンチは、弘法堂のすぐ北側に隣接したトレンチである。層序は、上から表土、暗褐色土層、茶褐色土層、茶褐色砂質土層で、表土から地山までの深さは90cmである。暗褐色土層から上はかなり攪乱していて、近世の一時期に人為的に埋積された形跡がある。遺構としては、トレンチ中央部を東西にはしる幅40～50cm、深さ10cmの溝（溝1）と、これに直交する位置にある幅30cm、深さ30cmの溝（溝2）を検出した。溝1からは、中世の陶磁器と土師質土器が出土している。またピットが2個検出され、ピット1からは白磁が出土している。

第8トレンチは、第7トレンチと第9トレンチの中間に設定したトレンチである。遺構としては、トレンチの南西隅に深さ1.2mの土坑の一部が検出された。内部から江戸時代末から明治にかけての陶磁器をはじめキセルなどの日常雑器が出土しており、墓坑と考えられる。

第9トレンチは、第8トレンチの西に設定した。遺構としては、ピット1個を検出した。遺物としては、近世の陶磁器や瓦が出土している。

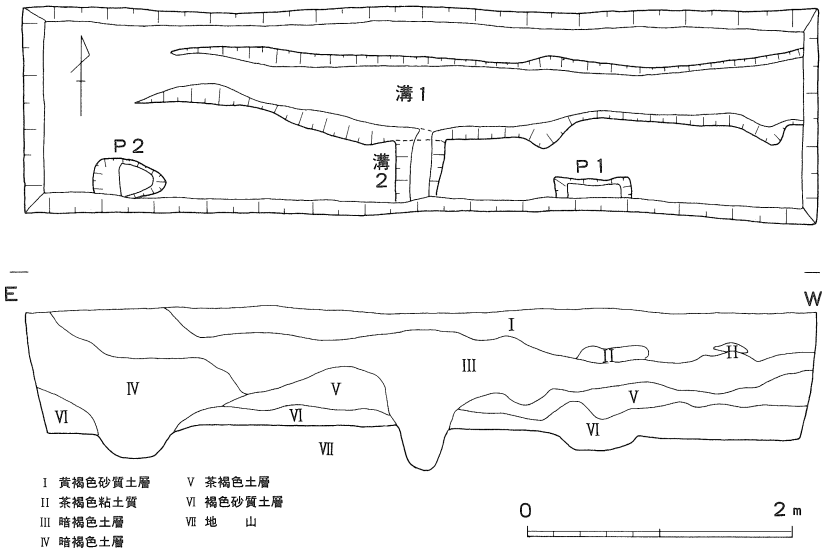


図15　第7トレンチ遺構実測図

２－２　本堂の北側（12・18Ｔ）

第12トレンチ

本堂のすぐ裏に設定した東西5.5ｍ、南北3.5ｍのトレンチである。

表層から非常に堅緻な層であったが、版築は認められなかった。表土から50cmの深さに広がる黒褐色土層の直上から瓦溜りが検出された。位置は、トレンチの最西部で、２×２ｍの範囲に広がり、殆んどが平瓦で構成されている。瓦溜りの下層は、黒褐色土層で、10～30cmの厚さで西に傾斜している。この土層からは瓦は全く検出されず、土師器の細片のみが出土した。

遺物としては、瓦、土師器があり、瓦は丸瓦と平瓦で、丸瓦では有段式のものは凸面をヘラ成形し、凹面は布筒の布痕がある。平瓦は凹面が幅２cmほどの模骨痕があるもので、凸面には縄目文の押型具による叩き痕があり、端面に指頭痕やヘラケズリのあとがよく残っているものがある。

土師器は、頸部がくの字に曲がる甕で、頸部以下の内面はヘラケズリである。

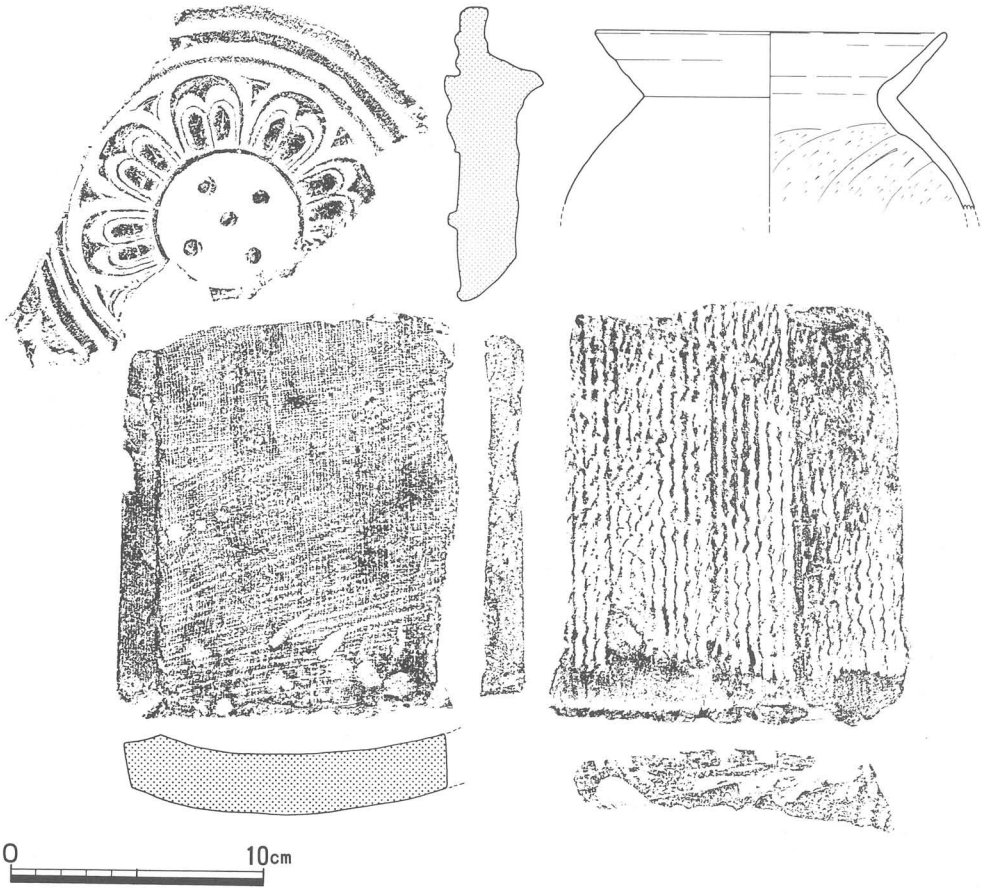


図16　第12トレンチ出土遺物

第18トレンチ

本堂の裏に設定した南北3.5m、東西10mのトレンチである。東は、昭和58年度に調査した第12トレンチに、西は、昭和59年度に調査した第16トレンチに繋がるように設定した。第12トレンチにみられた堅緻な層の西への広がりを確認する目的があったが、第18トレンチでも、表土下は堅緻な茶褐色土層が西へ7mも続いていた。この層の下底には、第18トレンチの西寄りで2×3mの範囲に瓦溜りが検出され、平瓦を主体とした瓦類が多量（コンテナ5箱分）に出土した。瓦溜りは厚さが約20cmで、その上面は北から南へ緩く傾斜している。その下層は炭化物を多く含む黒褐色土層で、特にトレンチ中央部の土壙1からP1にかけての東西3m、南北2mの範囲に約2cmの厚さで炭化物集積層が確認された。同じような層は、本堂の西側に設定した第16トレンチでも部分的に認められた。

また、特にP1には、炭化物が充填していており、ピット内からは土師器の皿が少なくとも6個体はあった。土師器には、螺線状や放射状の暗文をもつものがあり、炭化物が堂宇の一部が焼失したことによるものとすれば、その時期を決定する判断材料になる可能性は強い。

なお、遺構としては、80×60cmで深さ20cmの不整形ピットのほか、土壙や落ち込み状遺構が認められたが、その性格は不明である。

また、人頭大の石を含む配石が検出されたが、トレンチ外の南北に広がる可能性が強く現時点では詳細は不明である。

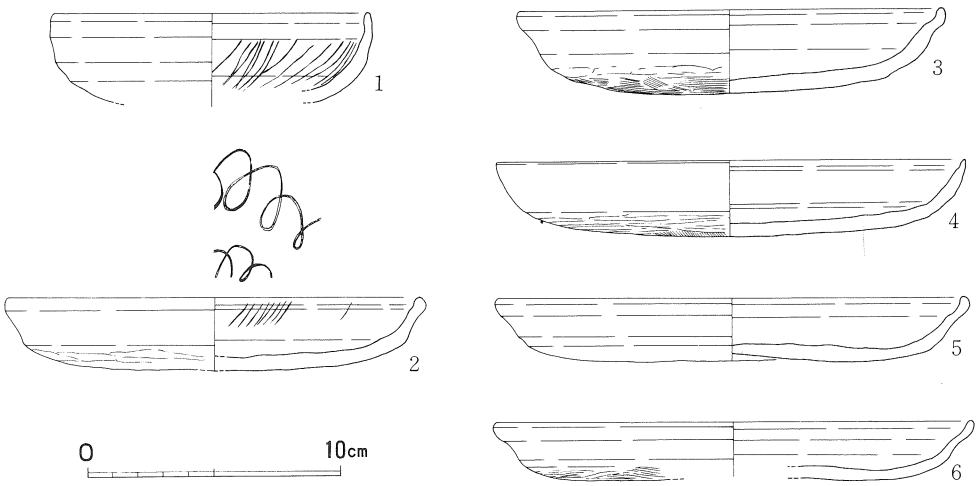


図17　第18トレンチ出土遺物（土師器）

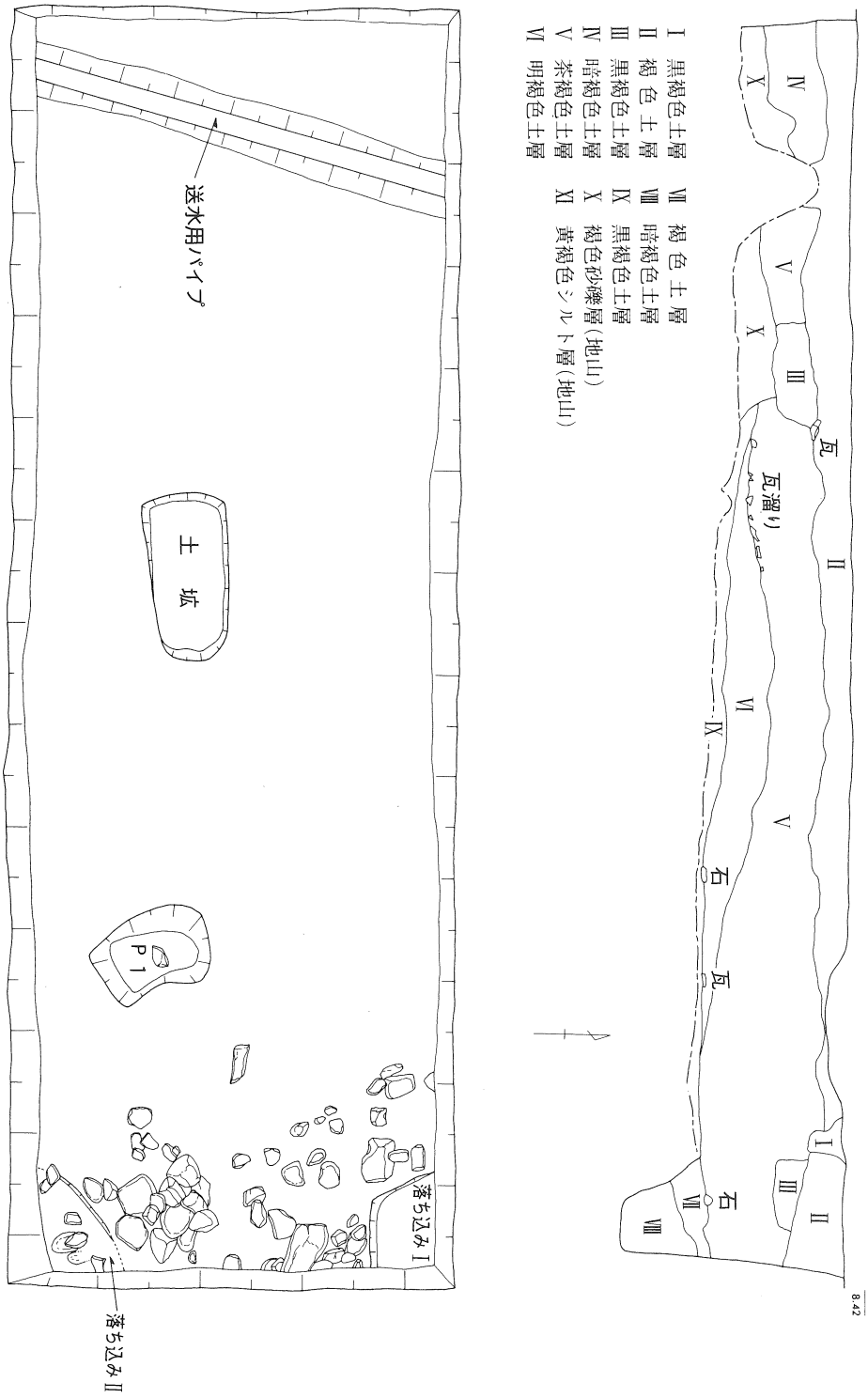


図18　　第18トレンチ遺構実測図

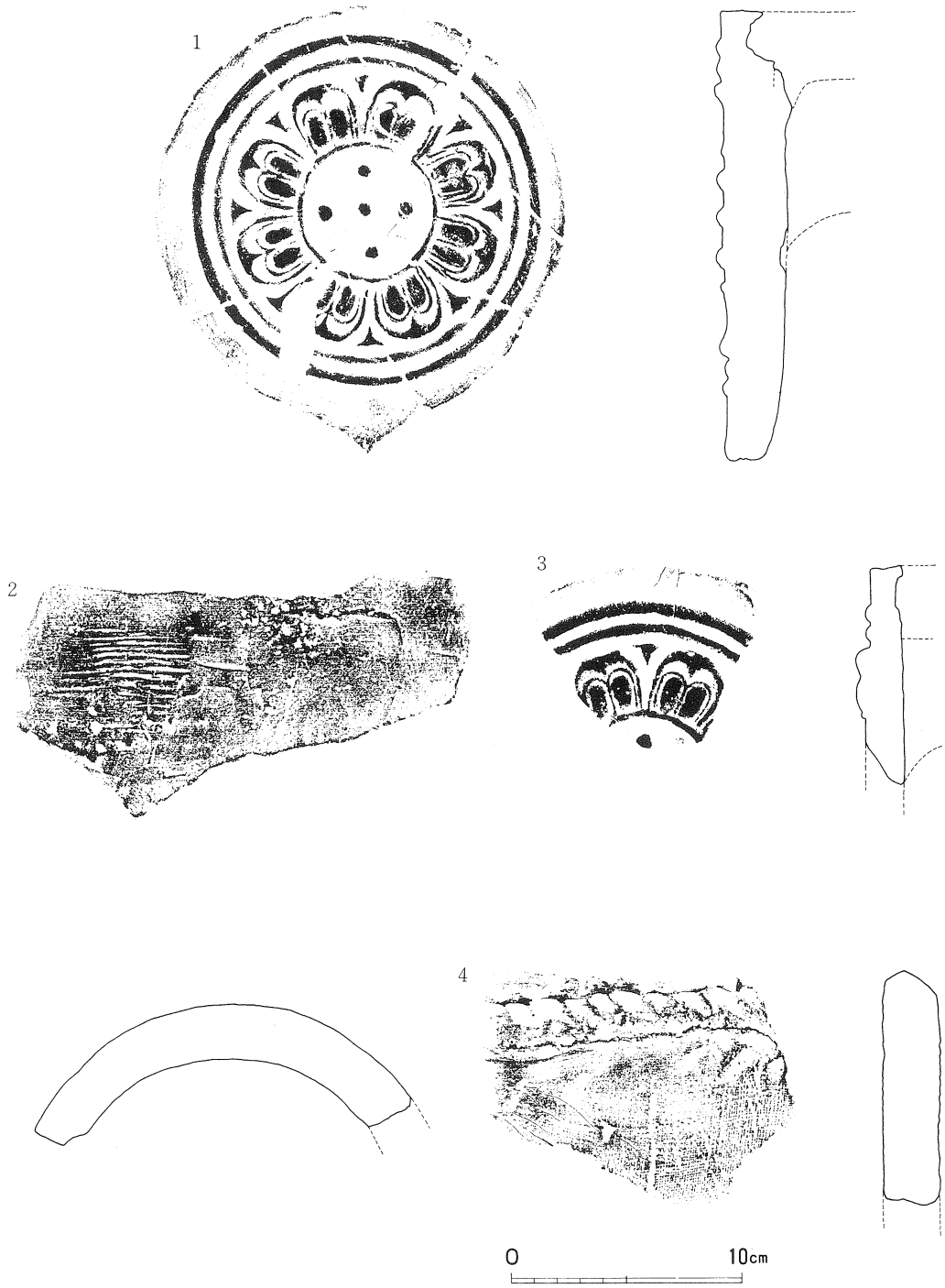


図19　第18トレンチ出土遺物（瓦）

18トレンチ出土の軒丸瓦は８個体分出土している。うち１点がほぼ完形に近いほかはいずれも破片で、周縁部のみ残るものが３点ある。

殆んど完形のものは、水切瓦である。神門寺軒丸瓦１類である。この瓦は直径18cmで厚さは中央部分で2.6cmある。瓦当文様は、内区は径5.8cmの中房に１＋４の蓮子をもち、花弁は弁端が円形となり、先端は反転し、子葉は細い輪郭をつけた複弁で８枚ある。弁幅は３cm、弁長は３cmある。外区は幅0.8cmの太い圏線を二重にめぐらし、周縁は幅広の平縁である。瓦当面下方の三角状突起は、周縁の幅が１cm～1.2cmあるのに対して、2.6cmとなっている。周縁側面は指頭による調整で、いくらか面取り気味であり、三角状突起部分のみはヘラ削りによる調整をしている。丸瓦部との接合は印籠つぎで、そのあと上下を粘土で押さえているが、指による圧痕列が顕著に残る。裏面はなでによる調整である。胎土には長石、石英粒が混じるがよく精選され、焼成は土師質で、色調は黄褐色である。

他の軒丸瓦片は文様からみると、上で説明した軒丸瓦１類のようである。厚さは中央寄り部分で、1.7cmの薄手のものもある。胎土、焼成、色調とも似かよっている。図19－３のものはそれらの１例である。

軒丸瓦につく丸瓦部分が一緒に出土しているが（図19－４）、凹面には細かい目の布目痕があるが模骨類はみえない。凸面には粘土板からの糸切り痕とヘラ削り調整痕がみられる。瓦当部との接合は半乾きの段階でおこなわれており、接合部に指頭による押さえ痕跡がよく残っている。厚さは2.2cm、側縁はヘラ削りである。色調は茶褐色で、胎土には長石石英粒を含み、焼成は土師質である。

軒平瓦は発見されていない。鬼瓦の破片と思えるものが１点ある。

２－３　本堂の西側（15・16・17Ｔ）

本堂の西側を南北に貫き、土塁付近まで至る細長いトレンチを設定した。本来は、１本のトレンチとすべきだが、礎石と考えられる大石があるため、一部を東にずらし変則的になっている。このトレンチ設定の目的は、法起寺式伽藍配置を想定した回廊もしくは金堂の一部を検出することにある。

三本のトレンチは、北からそれぞれ２×10ｍ、２×3.5ｍ、２×15ｍの規模で、深さは60～80cmである。

遺構としては、15トレンチから溝状遺構（上幅80cm、下底幅50cm、深さ140cm）が検出されたが、これは明治期以降に本堂裏に掘られた池に繋るもので、新しい時期のものである。16トレンチからは、ピット７、土坑１のほか、径20cmを最大とする比較的小さい石で構成された石列の一部が検出された。これは、版築層が認められないことや、石列の方向から

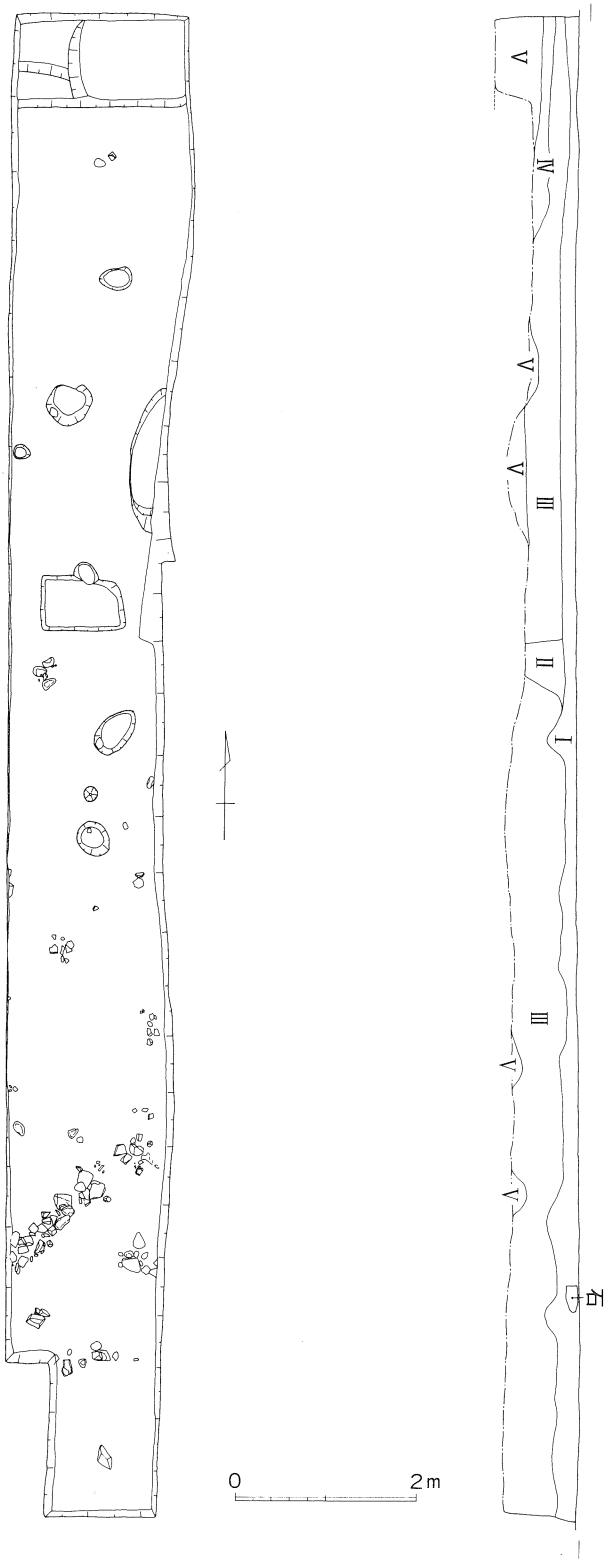


図20　第16トレンチ遺構実測図

みて、直接古代寺院に結びつく可能性は少ない。また、石列の北側は緩く落ち込んでおり、その付近から第18トレンチで認められた炭化物が薄く広がっていた。

遺物としては、瓦類のほか、弥生式土器、土師質土器、染付などがある。

16トレンチ出土の軒丸瓦片は、復元するとおよそ直径17cmの大きさのもので、全体の約8分の1ほどの破片である。厚さは中央寄り部分で2.3cm、周縁部分で2.8cmある。

瓦当文様は内区は中央部分が遺存せず不明であるが、花弁は子葉のある切込反転の単弁

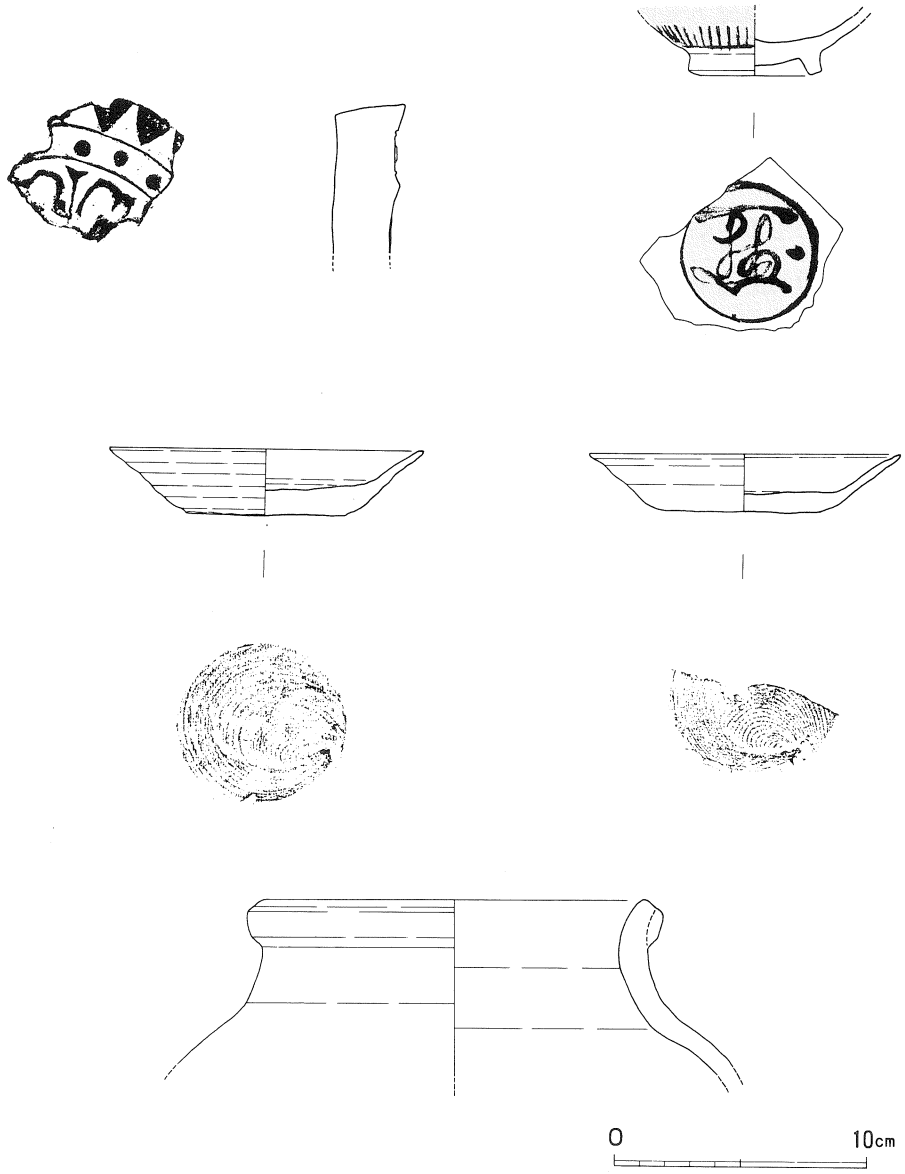


図21　第16トレンチ出土遺物

で８枚もつと考えられる。弁副は2.4cm、弁長は2.3cm以上ある。外区は、径0.5～0.6cmの珠文が１cm間隔で配列され、全部で26個ほどめぐると考えられる。そして、底辺1.5cm、高さ1.3cmほどの内向きとなる鋸歯文が陽刻されてめぐっている。鋸歯文が線刻でないのは大きな特色である。色調は灰青色で、胎土には多くの石英、長石粒を含みやや粗い感じをうける。焼成は須恵質が良好である。

瓦当の周縁はヘラ削りによる調整であり、裏面もヘラで削って調整されている。丸瓦部は失われていて、接合などの様子は不明である。この瓦のような特色をもつ瓦は神門寺廃寺で初例であり、出雲地方で他に類例は知られていない。神門寺軒丸瓦３類である。

２－４　土塁（13Ｔ）

土塁は、切断部で境内との比高１ｍ、基底部幅７ｍの規模を有し、一部後世に削平されたところもあるが、境内の西、北、南を繞っている。

境内の西北部の土塁を切るようにして1.5×6ｍの南北に長いトレンチを設定した。このトレンチは、土塁の築造時期を明確にし、それによって古代寺院の寺域の輪郭を推定するために設定したものである。

土塁の層序は、表土層、褐色土層、黒褐色土層などがあり、Ⅶ層が自然堤防の砂層となっている。このうち、土塁の大部分を構成するのは、第Ⅱ層の褐色土層で、同層からは古い遺物はなく、白磁片などが出土した。また、第Ⅵ層を切り込んで第Ⅴ層の下底にはピットが検出され、北側のピットからは唐津系の壺[註(1)]が出土した。この壺は、底部が平底で、内外面に釉がかかっており、淡暗緑色を呈する。内面は黄白色を呈し、同心円状のタタキが胴部にひろがり、底部にはナデを施している。また、頸部から上を欠いているが、内部に

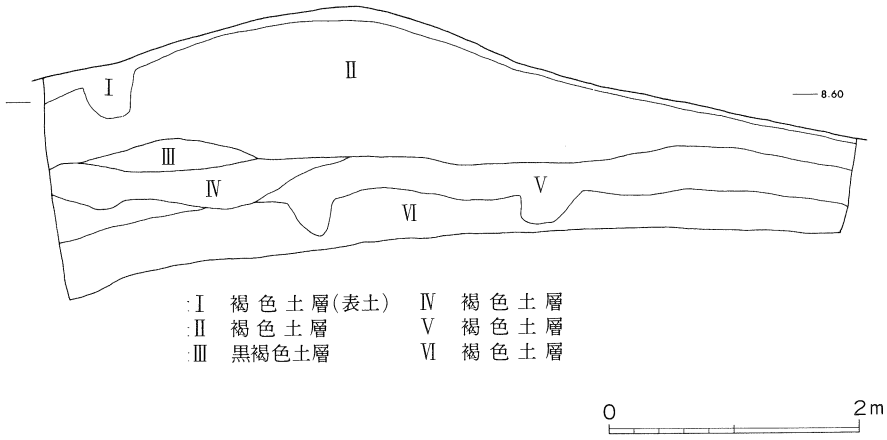


図22　第13トレンチ東壁断面実測図

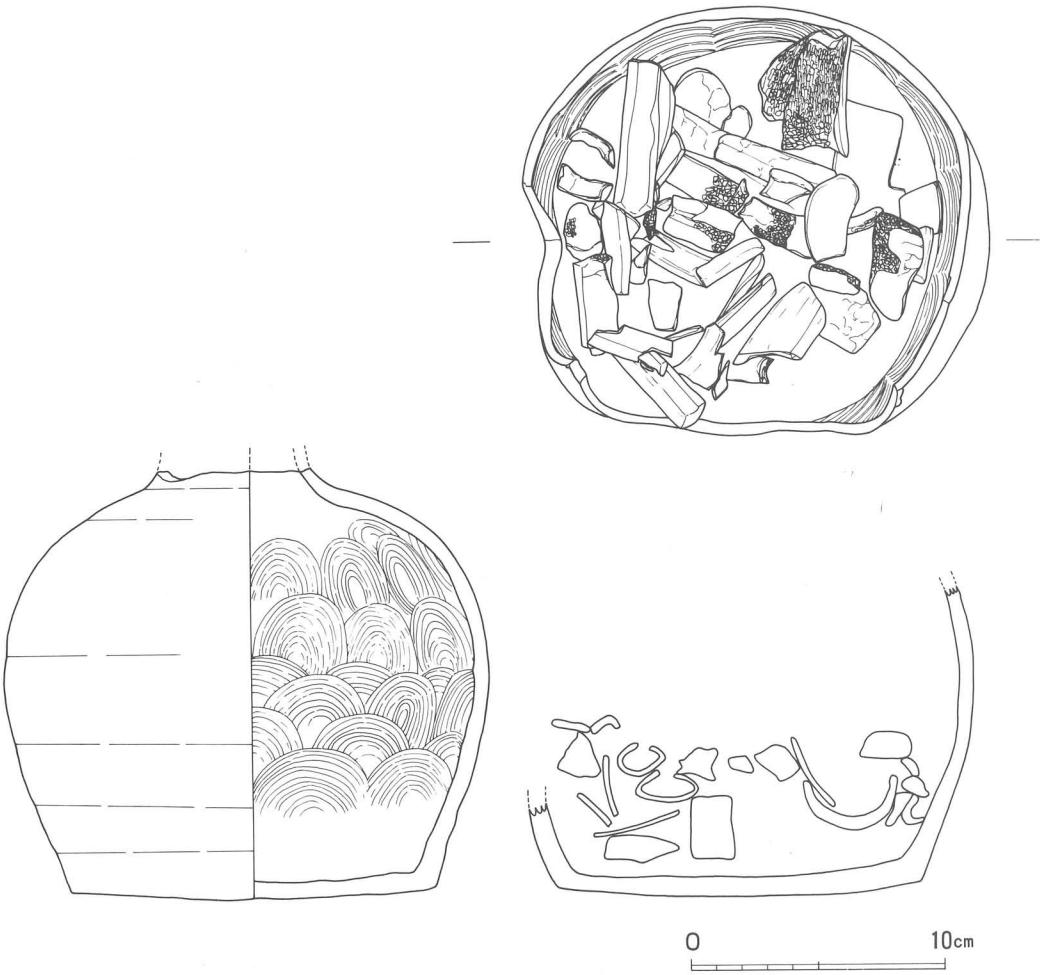


図23　第13トレンチ出土骨蔵器

はかなりの量の骨片があり、一部は骨粉になっていることからみて、骨蔵器と考えられる。さらに、付近からは角釘の破片が二点出土しており、木箱などに納めてあった可能性もある。

そうしてみると、土塁の築成は、近世を遡らないことが推定できる。

また、その他の出土遺物としては、土師質土器や、軒丸瓦片、平瓦片などがある。

註(1)　島根県立博物館　村上勇氏の御教示による。

２－５　庫裡の北側（19・20・21・22）

第一次・第二次の調査を実施してみて、神門寺境内にあったと推定されている古代寺院が、当初の想定よりもかなり寺域が狭いことが判明した。そのため、第三次調査の一部として、庫裡の裏庭にある礎石の傍らにトレンチを設定し、礎石が原位置を保っているかどうかを手懸りとして、主要伽藍の存在を検出することにした。

礎石は、庫裡の裏庭の中央やや西寄りにある。一辺が140cmのやや方形状の大石の表面に幅10cm、深さ10cmの環状溝を径80cmに配している。現地表から60cmの高さがあるが、第19トレンチを調査した結果、さらに地表下70cmの深さまで達していることがわかった。

第19トレンチは、礎石のすぐ南側に設定した小トレンチである。当初120×80cmで設定したが、のちに礎石まで拡張した。調査の結果、地表下40cmに版築の上面があり、灰褐色粘質土、淡赤褐色粘質土、茶褐色粘質土、暗茶褐色粘質土、黄褐色粘質土の各層によって版築層が構成されていた。特に、第Ⅲ層の灰褐色粘質土と第Ⅴ層の茶褐色粘質土は非常に堅緻であった。

礎石の下端は、版築層の上面よりも20cm深い位置にあるが、土層断面観察によって、版築層を斜めに切り込んだのち、礎石を据え、礎石のまわりは径60cmの根石で固めたうえ、暗灰褐色土を入れていることが明らかになった。それによって、この礎石は当時のままであり、移動したものでないことがほぼ確実で、基壇をもつ古代寺院の伽藍遺構の一端が初めて明らかになった。

第20・21・22トレンチは、第19トレンチで明らかになった基壇が礎石を中心としていかなる範囲に広がっているかを知るために、礎石の北、北西、西にトレンチを設定したものである。なお、礎石の南と東は庫裡裏の庭園になっているため、トレンチは設定できなかった。

第20トレンチは、礎石の北２ｍを基点に北へ幅0.5ｍ、長さ4.5ｍの細長いトレンチであるが、のちに長さ３ｍを１ｍ幅にまで拡張した。このトレンチでは、礎石の中心から 4.4ｍの位置までは版築層が明瞭に残っていた。しかし、それから北は撹乱によってよくわからないが、西壁セクションでの観察によれば、礎石の中心から5.7ｍの位置に基壇を構成する版築層である茶褐色粘質土が僅かではあるが認められた。また、第21トレンチでも、基壇を構成する版築層の北限が、第20トレンチと、礎石からほぼ同距離であった。第22トレンチでは、礎石の中心から4.2ｍの位置まで基壇の西限が確認できたが、瓦積みや石列は、第20・21トレンチと同様、検出できなかった。

なお、遺物は殆んどなく、僅かに瓦の小片が２点出土したに過ぎない。

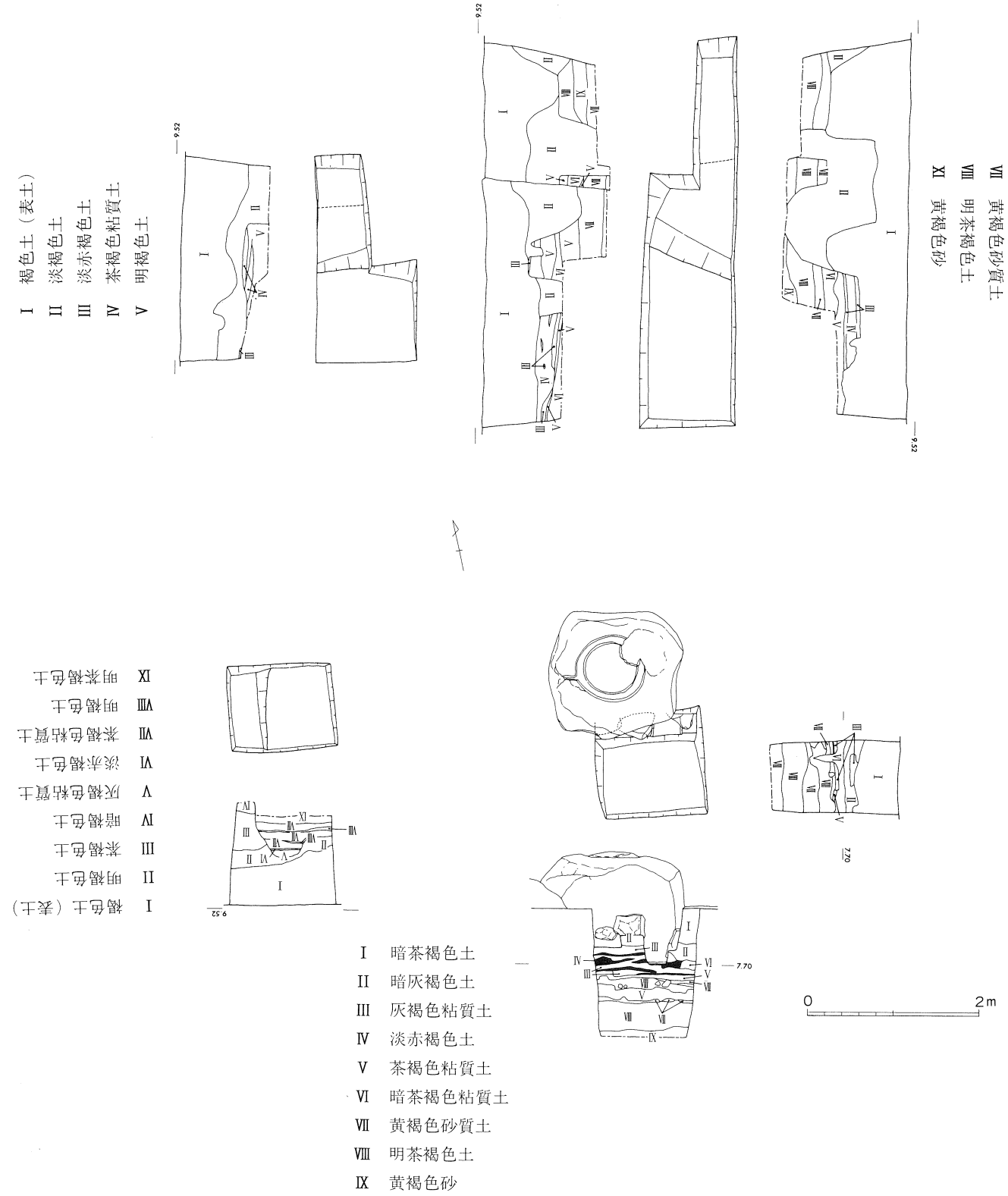


図24　　第19、20、21、22トレンチ遺構実測図

4. 調査に関連して

(1) 神門寺について

神門寺は、国鉄出雲市駅の南西約２㎞に所在し、80ｍの参道を通り山門を入ると、境内は約12,000㎡、樹令300年以上のケヤキ、タブノキなどが鬱蒼としている。

神門寺の寺域は方２町(218ｍ）であったと伝えられているが、それは「出雲国神門郡神門寺之絵図」に見ることができる。境内中央に堂があり、東に客殿、西に鎮守、南西に毘沙門天など建物が記載されている。松並木の参道は長さ１町とあり、参道の西に「佐々木義清位牌所」東に「塩冶判官高貞位牌所」と記入されている。南東方の山地に「神門寺院居所、般若寺」、東方の山地には「佐々木五郎義清以来貞清高貞　此歳三百余年相続城山也」と記入されている。

この絵図には作成された紀年がないので、以下考察してみたい。

１．高貞の死は暦応４年（1341）であるから、絵図はそれ以後のものである。

２．義清以来三百余年とは、出雲国初代の守護は佐々木義清で、西暦1200年頃であるから、1500年以降に作られた絵図となる。（注、高貞の死後塩冶氏は、尼子氏に追われる享禄４年（1531）まで続いている。）

３．神門寺隠居所般若寺と見えるが、神門寺文書の中に、「慶安５正月、定誉隠居願」がある。「塩冶旧記」によると、定誉上人は神門寺中興の祖とされ、寛永年間に般若寺を隠居所としている。定誉の隠居所とすれば、この絵図は1652以降に作られたものと考えられる。

（今岡　清）

図書名 (　)は成年	神門寺の記述抜粋
懐橘談 （１６５３）	今市という所に神門寺というあり　今浄土派の僧住せり　記に曰く 新造院の１所知らず此寺を云うにや
雲陽誌 （１７１７）	……当山は往時行基諸州行脚のとき此所に来たまう　神東の下司帰依して草堂１宇を造立し行基を供養せり……行基上洛の後肇公という唐僧来て住居せり方丈の弥陀如来は肇公唐より伝来し給う……天応元年建立故に天応山という……風土記に載る新造院一所……神門臣等造とあるは此寺をいうにや　38世の住持良空法師上洛して源空上人の教戒を蒙……帰しより永浄土の伽藍となれり寺内塩冶判官の古墓あり
出雲鍬 （１７４０？）	寺地12町は神門氏の居所なり……
神門郡北方 萬指出帳 （１７５４）	……本堂慶安元子11月天火に而炎上仮仏殿５間半に８間こけら葺庫裏６間に12間茅葺……（以下寺内の釈迦堂外４堂春日明神外３社を記す） 寺領高36石３斗２合、外に川田新田２町歩、境内古来より御検地不入御竿
皇国地誌 （１８５３？）	寺地　東西55間７分、南北１丁40間６分　面積９反４畝15歩……56代乗心和尚明徳３年壬申に至り浄土宗に定す

図25　　土塁西の石塔

一石五輪塔

中世の塩冶氏と関係のあった出雲大社北島家ゆかりの塔といわれている。

(2) いわゆる水切瓦の出土遺跡と様相

軒丸瓦の瓦当面下端部を削って三角状に尖らせたり、突起を付けた特異な形状の古瓦を一般に水切瓦と呼称している。これらの古瓦は、備後北部を中心に出雲・安芸・備中の一部に分布しており、現在までのところこの陰陽を結ぶ地域以外では全く検出されていない。これは、古代の造瓦技術や組織の解明のみならず、初期仏教文化の地方伝播を研究する上で注目すべき遺物といえる。

この特異な形状の瓦を最初に注目し論述されたのは梅原末治氏[註(1)]で、昭和27年のことである。以後、近藤正氏や江谷寛氏等によって研究が発表されている[註(2)]。また、その驥尾に付して筆者も、昭和44年にその様相を整理して発表[註(3)]し、以後も二・三の小文[註(4)]でふれてきた。ところが、その後各地で寺院跡の発掘調査も相次いで行われ、新しい発見もあったのでここらで再整理してみたい。

水切瓦出土遺跡　これまでにいわゆる水切のついた瓦を出土した遺跡は10個所で、寺跡８個所、窯跡２個所となる。また、まだ水切のついた部分が検出されていないが、明らかに同系統と思われる瓦を出土した遺跡が２個所あり、今後の調査によっては水切のついた瓦が出土する可能性が大きいので、ここでは一緒にとりあげておきたい。これを県別にみると広島県が９個所で、国別では備後国が７個所、安芸国が２個所である。岡山県は２個所でいずれも備中国にある。島根県は１個所で出雲国である。

次に各遺跡の概略と出土瓦について簡略に紹介してみよう。

１　神門寺境内廃寺―島根県出雲市塩冶町所在。旧出雲国神門郡に属す。平野部に立地し、現浄土宗神門寺の境内に埋もれる。伽藍配置は明らかでないが、心礎と版築された基壇土が確認された。

出土軒丸瓦は３種知られ、複弁文の２種に水切がついている。軒平瓦は明らかでない。詳細は本文参照。

２　寺町廃寺―広島県三次市向江田町寺町所在。旧備後国三谷郡に属す。山間の南に張出した丘陵台地に南面して建立され背後に山を負っている。法起寺式の伽藍配置で、塔跡・金堂跡・回廊跡が検出されている。回廊は講堂の中央に取付く。中門跡・南門跡及び外郭の築地跡は明確にできなかったが、地形等からみて寺域はほぼ１町四方と想定される。『日本霊異記』所載の三谷寺と推定される。

軒瓦は軒丸瓦が５類８種あるが、軒平瓦は篦で一本の沈線を入れたものが１点確認されている。軒丸瓦は素弁文のもの３種、複弁文のもの３種、素弁と複弁が交互に配された混弁文のもの１種、単弁文のもの１種である。単弁のものは断片のため明らかでないが、そ

の他はすべて水切が付いている。

この他、小金銅仏頭・小塑像仏頭・三彩瓶片等が出土している。

3　上山手廃寺―広島県三次市向江田町上山手所在。旧備後国三谷郡に属す。平野を臨む丘陵の端部に位置し、南面していたものと推定される。金堂跡および講堂跡と推定される遺構が検出されており、法起寺式配置と推定されるが、塔跡が検出されていない。門跡・回廊跡・築地跡も明らかでない。なお、金堂跡は二重基壇と思われる。寺町廃寺の西南約1kmに位置し、山間への入口にあたり、寺町廃寺と関わりのあったことが想定される。

軒丸瓦は複弁文1種のみで、寺町廃寺のＦＩａと同笵と思われ、水切が付いている。軒平瓦は明らかでない。

4　寺戸廃寺―広島県三次市三次町寺戸所在。旧備後国三次郡に属す。平野を臨む低い台地に南面し山を背にしている。昭和44～45年に三次市教育委員会によって発掘調査がなされ、基壇跡等の一部が検出されているが、伽藍配置は明確でない。寺域は1町四方弱と推定されている。

軒丸瓦は複弁文2種で、ＦＩは寺町廃寺・神門寺廃寺・康徳寺廃寺などと酷似しているが、同笵とは思えない。ＦIIの花弁は弁端が尖り他例とやや異なった形をしている。何れも水切がついており、特にＦIIは丸瓦取付部から大きく削って三角状を呈している。やはり軒平瓦は明らかでない。

なお、この他にミニアチュアの鴟尾が出土している。

5　伝神福寺跡―広島県庄原市宮内町隠地所在。旧備後国三上郡に属す。小丘陵の南麓に位置し、礎石が神社に転用されているが未発掘で遺構は明らかでない。『芸藩通志』に神福寺、田間より古瓦を出すと記されている。

軒丸瓦は素弁文と複弁文の2種で、ＳIIは寺町廃寺に酷似しているが、水切が付いていたかどうかは明らかでない。Ｆ類の花弁は他例と類似しているが、中房と外縁が異なっており、水切は付いていない。

6　康徳寺廃寺―広島県世羅郡世羅町寺町所在。旧備後国世羅郡に属す。世羅平野を臨む南面する山麓に位置している。現臨済宗康徳寺の門前にあり礎石も出土しているが、未発掘で遺構は明らかでない。

軒丸瓦は複弁文1種で、やや大振りであるが寺町廃寺ＦＩに類似している。水切は小さな突起となって付いている。

なお、唐草文軒平瓦と鴟尾が出土したと言われているが明らかでない。

7　大当瓦窯跡―広島県三次市和知町大鳴所在。旧備後国三谷郡に属す。寺町廃寺の背

後を一山越した、北西約1.5kmの西面した低丘陵地に位置している。範囲確認の試掘調査で約10基の窯跡が明らかになった。平窯が検出されているが、登窯の存在も予測される。

出土瓦は、複弁文と素複混弁文の２種で、何れも水切が付いており、寺町廃寺と同笵でその瓦窯跡と考えられる。

なお、鬼瓦と塼も出土している。

8　亀井尻瓦窯跡―広島県庄原市上原町亀井尻所在。旧備後国恵蘇郡に属す。南に張出した丘陵台地の縁端部に位置する。昭和40年に広島大学が発掘調査し平窯が１基明らかになっている。ロストルを有しているが焼成室と燃焼室に段差がなく同一床面である。

出土瓦は、複弁文軒丸瓦で水切が付いている。ＦＩであるが、使用寺院についてはまだ明らかでない。

なお、付近の丘陵から均整唐草文軒平瓦が１点出土しているが、遺構は明らかでなく寺跡かどうかは不明である。恵蘇郡内に寺跡の存在も予測される。

9　横見廃寺―広島県豊田郡本郷町下北方所在。旧安芸国沼田郡に属す。丘陵の南麓に位置する。昭和46～48年に広島県教育委員会が発掘調査を行い、講堂跡と推定される東方基壇、塔跡と推定される西方基壇、回廊跡・築地跡などを検出している。寺域は約東西100ｍ×南北70ｍで、西面の特異な配置と想定される。

軒丸瓦は素弁文、単弁文、複弁文、パルメット文、細弁文など７類が明らかになっている。単弁文は大和の檜隈寺や栗原寺と同笵品で、明官地廃寺とも同笵である。パルメット文は大和法隆寺系のパルメット文と酷似している。これまでに複弁文で水切の付いたものが１点出土している。軒平瓦は重弧文が２種、その他鴟尾・文字瓦なども出土している。

10　明官地廃寺―広島県高田郡吉田町中馬所在。旧安芸国高宮郡に属す。東に張出した緩丘陵地に位置する。昭和59年の試掘調査で、瓦積み基壇が検出された。

軒丸瓦は素弁文、単弁文、素単混弁文がある。単弁文の１種に水切の付いたものが出土した。７弁で子葉の中に綾杉状の毛羽があり、周縁は重圏文である。また、単弁文の１種は横見廃寺、檜隈寺・栗原寺等と同笵である。

11　大崎廃寺―岡山県岡山市大崎西の前所在。旧備中国賀夜郡に属す。南に張出した丘陵に囲まれた平地に位置する。未発掘のため遺構は明らかでない。

軒丸瓦は素弁文に細線で複弁文様を描いており、周縁の圏線が下端の水切に沿って尖っている。軒平瓦は不明で、他に鬼瓦が出土している。

12　栢寺廃寺―岡山県総社市南溝手栢寺元所在。旧賀夜郡に属す。平野の中心部、現門満寺の境内に位置する。昭和52～53年に岡山県教育委員会によって発掘調査が行われ、東

西１町×南北１町半の寺域が想定されている。門満寺境内地に塔心礎、礎石等が残存しており、発掘で塔基壇が検出されている。

軒丸瓦は素弁文・複弁文・細弁文で、軒平瓦は篦描き重弧文と無文厚手、均整唐草文及び塼がある。素弁文軒丸瓦は、寺町廃寺ＳＩと同笵のものと周縁の圏線だけ異なると思われるものがある。これらに水切が付いていたかどうかは破片のため明らかでない。

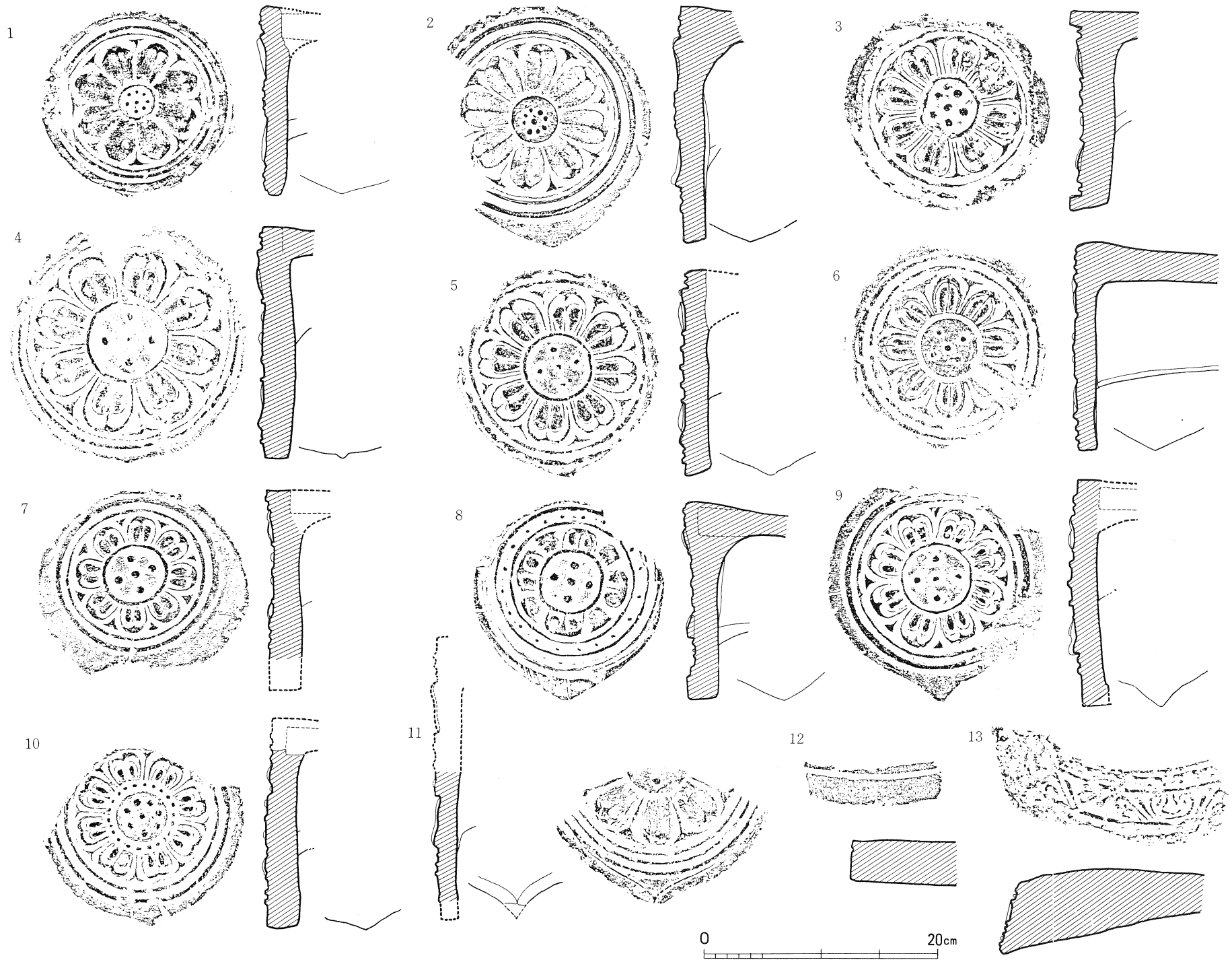
水切瓦の様相　これまでに明らかになっている水切瓦の文様は、素弁文と複弁文が主流で、両者を混合したような素複混弁文もある。最近発見された安芸・明官地廃寺の単弁文を除いて、各文様とも類似したものが多い。特に、周縁部は平縁で２～３重圏の廻るものが多く、明官地廃寺のものがいわゆる山田寺式の高縁に重圏文であるのと寺町廃寺の混弁文が珠文帯を有するのを除けば、概して平縁重圏文系とでも称すべき様相がみられる。

素弁文類（Ｓ）―寺町廃寺の素弁文を標識とすると、花弁の広短なもの（ＳＩ）と狭長なもの（ＳII）に分けられる。８弁で比較的小さい凸中房に、ＳＩは１＋７、ＳIIは１＋４か１＋８の小さな蓮子が付いている。周縁は平縁で２重圏である。ＳＩは栢寺廃寺で周縁が２重圏の同笵のものと周縁が１重圏のものが出土しているが、何れも水切が付いていたかどうかは明らかでない。ＳIIは伝神福寺跡で出土しているが、笵型は異なり、水切についても不明である。

大崎廃寺の瓦は一応素弁文（Ｓ）として分類しているが、素弁に細凸線で複弁を表現したもので、他の複弁文のように子葉の隆起はないが、複弁文として分類すべきかもしれない。また、周縁の３重圏の他に下端の水切部に沿ってやはり細線で水切の尖りを表現している。文様で水切を表現した唯一の瓦である。

複弁文類（Ｆ）―寺町廃寺の複弁文（ＦＩ）を標識にすると、８弁の花弁は細い凸線で盛上った子葉を囲んで複弁となっている。中房は大きく幅太の凸圏線内に１＋４の大振りの蓮子が入っている。周縁は平縁で２重圏である。花弁の長短によってａ．ｂ．ｃに分けられる。寺町廃寺ＦＩａは同笵瓦が上山手廃寺にあり、酷似したものは寺戸廃寺ＦＩ、康徳寺廃寺Ｆである。寺町廃寺ＦＩｂは、大当瓦窯跡で出土しており、亀井尻瓦窯跡Ｆ・神門寺廃寺ＦＩが酷似している。

このＦＩと類似しているが、やや文様構成の異なるものが神門寺廃寺のＦIIと寺戸廃寺のＦIIで、前者は凸中房に１＋７の蓮子を配し、花弁と中房の間に珠文帯が廻っている。間弁は珠文帯まで伸びて花弁を区画している。後者は、中房が凹圏で囲まれているため、一見すると凸中房状にみえ１＋４の蓮子が入る。花弁は先端が尖っており細凸線もこれにしたがって尖っている。２重圏のものと３重圏のものがある。水切は丸瓦取付部から大き



1.寺町廃寺ＳＩ　2.寺町廃寺ＳII　3.神福寺Ｆ　4.康徳寺Ｆ
5.寺戸廃寺ＦＩａ　6.寺戸廃寺ＦＩｃ　7.寺町廃寺ＦＩｃ　8.寺町廃寺Ｋ
9.神門寺廃寺ＦＩ　10.神門寺廃寺ＦII　11.大崎廃寺Ｓ　12.寺町廃寺(軒平)
13.亀井尻瓦窯跡付近（軒平）

図26　水切瓦集成図

く三角状に削られている。

また、水切は明らかに付いていないが、花弁の文様構成が類似したものに伝神福寺跡のＦがある。中房は圏線で囲われた凹中房状で、１＋５の蓮子をもち、花弁は細長く、間弁は中房までとどいている。周縁は斜縁に面違い鋸歯文が付いている。重圏文系とは異なり複弁文類の祖形ではないかと思える。また、横見廃寺の複弁文は、花弁の形が異なるが他例と同様周縁は重圏が廻っている。１点のみ水切瓦を確認している。

素複混弁文類（Ｋ）―寺町廃寺と大当瓦窯跡から出土している。ＦＩ[1]と同様の中房に素弁と複弁が交互に配され８弁となっている。周縁は珠文帯が囲み、一段高くなって圏線状を呈している。

単弁文類（Ｔ）―明官地廃寺で最近出土したもので、いわゆる山田寺式の７弁文に水切がついている。明らかに備北の影響によるものであろう。

このように、いわゆる水切瓦は非常に特徴的な文様構成の類型の中で展開しており、大崎廃寺を除いては水切は笵型とは関係なく、削って作られており、任意に削られたためであろう様々な形となっている。

以上、最近の出土例を含めて水切瓦の出土遺跡と瓦の様相を簡単に紹介した。寺町廃寺や栢寺廃寺、神門寺廃寺など、近年の発掘調査の進展によって大きな成果があり、水切瓦の問題も再検討すべき段階に至っている。

出雲・備後・安芸・備中と分布の範囲は大きく変っていないが、寺町廃寺のＳＩと栢寺廃寺ＳＩの同笵・先後問題、寺町廃寺と上山手廃寺の関係、横見廃寺・明官地廃寺への影響、神門寺廃寺ＦＩＩの位置付け等課題も多い。

今後こうした問題点を一つずつ解明しながら、水切瓦の用途・製作技法・年代・分布・伝播等の研究を進め、初期仏教文化の地方伝播の様相を明らかにしたいものである。

（松下正司）

註(1)　梅原末治「古瓦についての一二の覚書」（史迹と美術22－８、昭和27年）

註(2)　近藤　正「備後寺町廃寺址と二三の寺院址に関する一つの試み）（歴史考古１、昭和32年）

江谷　寛「吉備国出土の古瓦」（古代文化19－６、昭和42年）など。

註(3)　拙稿「備後北部の古瓦」（考古学雑誌55－１、昭和44年）

註(4)　拙稿「瓦の様式と伝播」（古代史発掘９、昭和49年）

拙稿「仏教文化の受容」（古代の地方史２、昭和52年）

三次市教育委員会『備後寺町廃寺』１～３（拙稿　各まとめ、昭和55～57年）

(3) 神門寺境内廃寺の版築粘土層の残留磁気と年代測定への応用について

概要

地磁気中で粘土に力が作用した場合に生ずる残留磁気の実例として、神門寺境内廃寺の版築部の残留磁気を測定した。残留磁気の強度は比較的強く（平均 7×10^{-5} emu/gr）、方向は驚く程一点に集中した（95%誤差角　2.2°）。残留磁気の方向を遺跡の推定年代における地磁気の方向と比較して、寺院の版築粘土層は偏角を用いて年代測定ができるという今までにない見解を得ている。

序

焼土遺跡の年代を測定する方法として、地磁気の時間的変化を時計として用いる考古地磁気法がある。この方法では、焼土が焼成時の時計の針の位置（当時の地磁気の方向）を熱残留磁気の方向として記録している性質を応用している。ここで述べようとするのは、地磁気中で粘土に熱ではなく力が加えられた場合に生ずる残留磁気についてである。

粘土の大部分は非磁性体の層状粘土鉱物で占められ、その中に微量の磁鉄鉱等の磁性粒子が分布している。粘土の全磁気モーメントは個々の磁性粒子の磁気モーメントの合成和であるから、完全な混合が行なわれた場合、磁性粒子は全くでたらめな配向をし、全磁気モーメントは消滅する。しかし、何かの原因で磁性粒子の配向に偏りが生ずると、それに応じて磁気モーメントが出現する。堆積物の残留磁気に関する研究から、堆積後の圧密過程で粒間の水分が移動する際、磁性粒子が動かされ全体として地磁気の方向に磁気モーメントを持つ効果が認められている。したがって、地磁気中で粘土に力が作用した場合、(1)磁性粒子は向きを変える。そして水分が多い程、向きは変り易い。(2)磁気モーメントは地磁気の方向へ揃おうとする。この二つの効果に加えて、筆者は次の力と磁気モーメントの相互作用を考えている。(3)層状粘土鉱物の層面が力の方向と直角になろうとするので、面間にはさまれた磁性粒子もこの動きに順応し、全磁気モーメントも力の方向と直角になろうとする。

試料

神門寺境内廃寺の版築部調査のため、庫裡裏に残る礎石の周辺に4つのトレンチが掘られた。このうち、第19および第21トレンチから残留磁気測定用の定方位試料を採取した。試料採取は、こぶし大の試料を石膏で固め、方位をクリノコンパスで測定する方法で行った。

第19トレンチ

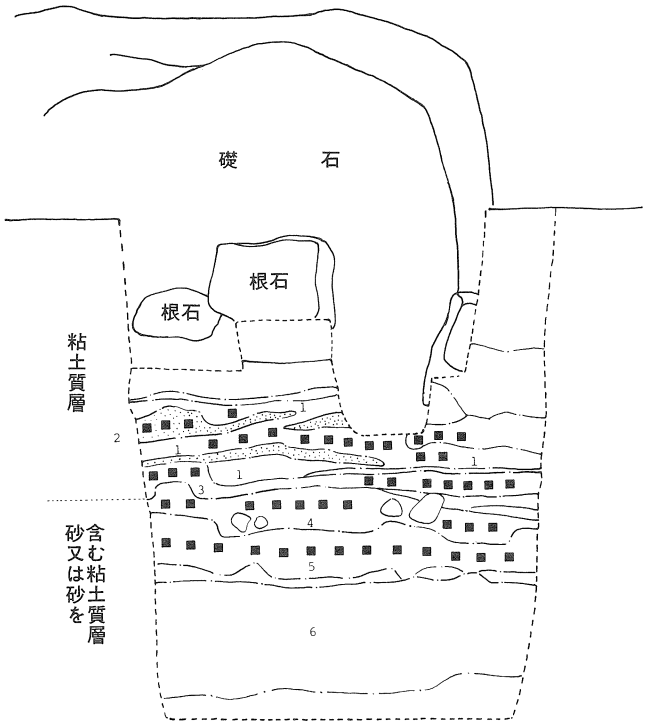
礎石に沿って掘られた第19トレンチの壁面には版築を構成する全粘土層が露出している。色と土質で分類した各層から、図－27に示すように試料を採取した。土層の名称と境界線は出雲市教育委員会で決められたものに従っている。

第21トレンチ

版築の最上部粘土層と考えられるトレンチ底面から20個の定方位試料を採取した。

測定結果

試料の残留磁気の強度と方向を無定位磁力計を用いて測定した。単位質量あたりの残留磁気強度の頻度分布を図－28に示す。残留磁気強度は10^{-5}～10^{-4} emu/grの値をとり、平均値は　7×10^{-5} emu/grである。焼土遺跡の熱残留磁気について、残留磁気強度は遺跡の焼成度によって弱いもの(炉跡)から強いもの（須恵器窯)まであるが、その値は10^{-6}～10^{-3} emu/grである。第19および第21トレンチの残留磁気の方向を図－29と図－30に示す。第19トレンチの測定結果は上部の粘土質層（図－27の１、２、３）と下部の砂を含む粘土層（図－27の4、5）



1．灰褐色粘質土
2．淡褐色粘質土
3．茶褐色粘質土
4．明茶褐色砂質土
5．茶褐色粘質土(粗砂を含む)
（以上　版築粘土層）
6．明茶褐色砂質土
（弥生～奈良時代の堆積層）

図27　　第19トレンチ版築層と試料採取位置

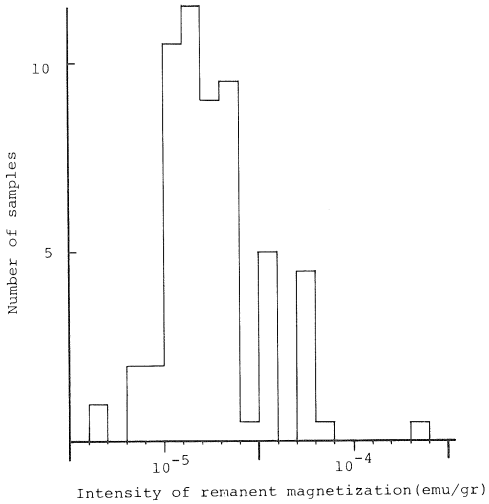


図28　　第19、21トレンチ版築層残留磁気強度分布

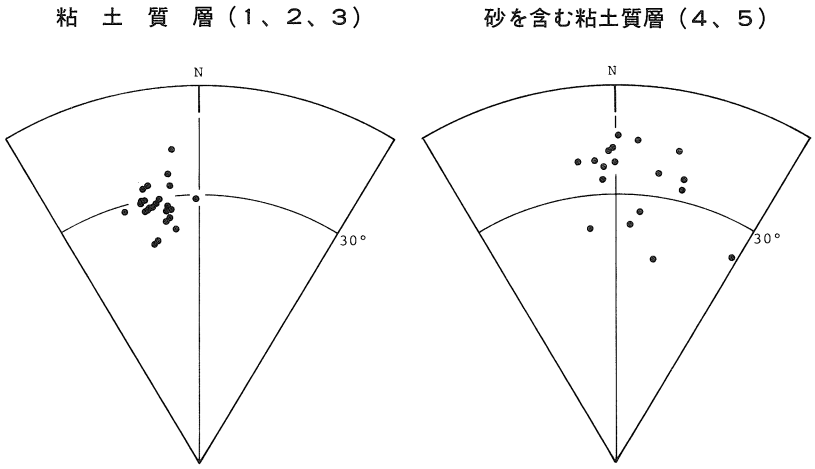


図29　第19トレンチ残留磁気の方向分布（シュミットステレオ投影図）
1～5の数字は図27におけるそれぞれの版築層を示している

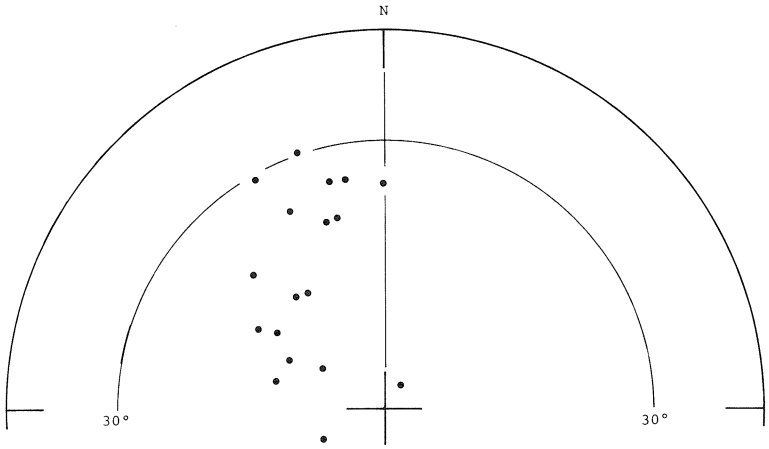


図30　第21トレンチ底部残留磁気方向分布（シュミットステレオ投影法）

に分けて示されている。第19トレンチについてみると、粘土質層と砂を含む粘土質層とでは、分布の中心が少し離れており、又前者が驚くほど一点に集中しているのにくらべて、後者はそれほどでもない。粘土質層の残留磁気の平均方向の95%誤差角は2.2°となる。
一方、焼土遺跡の熱残留磁気については、焼成度の悪いもので＞5°良いもので＜2°であるのが普通である。筆者が行った島根県邇摩郡明神古墳の版築盛土の残留磁気の測定結果においても、粘土のみの層と砂を含んだ粘土の層とを比較すると、残留磁気の方向分布の中心が異り、砂を含む粘土層の方が、方向の集中度が劣っていた。砂質層の場合、非磁

性鉱物粒子の不規則な形状がこのような結果をもたらしたと考えている。第21トレンチの残留磁気の方向は、第19トレンチの粘土質層がもつ方向からステレオ投影図の中心点にかけて分散している。第21トレンチの試料は第19トレンチの粘土質層の最上部と同じ層から採取されているので、このように残留磁気の方向が乱れているのは、発掘後の雨水の侵透や発掘作業に伴う踏みつけの効果によってオリジナルな残留磁気が壊されたためと考えられる。

考察

粘土質の版築層について、残留磁気の強度および方向の集中度が熱残留磁気とくらべて遜色がないのは注目に値する結果である。神門寺境内廃寺の年代は正確に決定されていない。しかし、出雲国風土記の記載や出土した古瓦の様式から奈良時代と推定しても無理はないだろう。[註(2)、(3)] 図－31には、西南日本の地磁気永年変化[註(4)]が実線で、神門寺境内廃寺の粘土質版築層の残留磁気平均方向（平均伏角31.3°　平均偏角9.1°W）が＋印で、誤差の範位（95％誤差角　2.2°）　が点線の楕円で示されている。 残留磁気の平均方向は奈良時代の地磁気の方向にくらべて、伏角は約25°浅くなるが偏角はほぼ等しくなっている。一方、版築粘

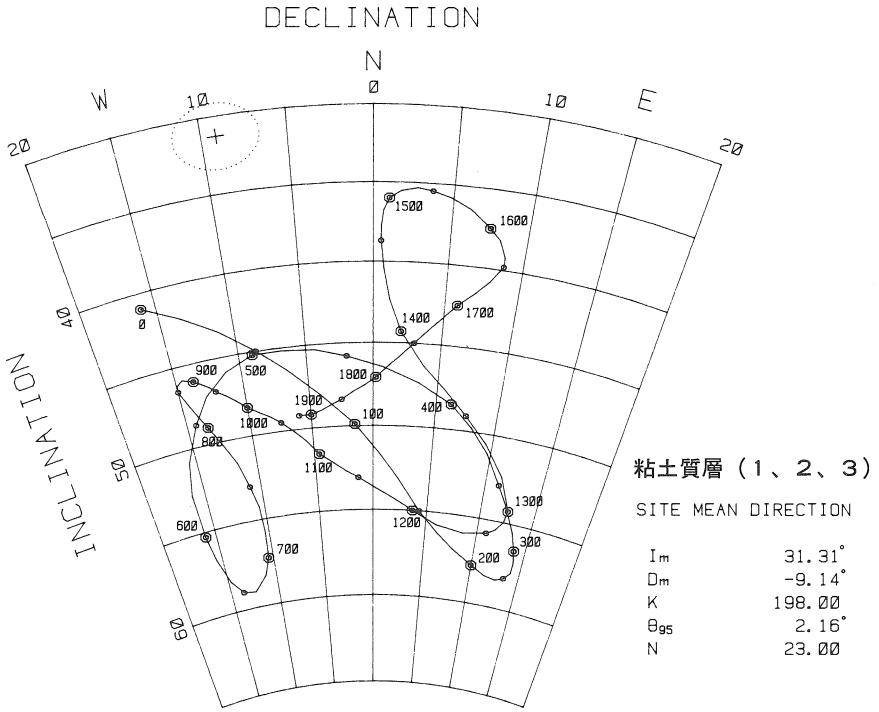


図31　　西南日本の地磁気永年変化と神門寺境内廃寺版築粘土質層の残留磁気平均方向

土層の築造工程において、粘土層には鉛直方向に力が加えられたと考えてよいから、はじめに述べた(1)、(2)および(3)の考え方を地磁気と力と粘土の系に適用すると、系の幾何学的対称性に基づいて図31に示されている神門寺境内廃寺の残留磁気と奈良時代の地磁気の関係を説明できる。このように、磁化機構についての考え方と遺跡の測定例が整合するので寺院の版築粘土層のように鉛直方向の強い衝撃力で衝き固められた粘土層は、偏角を用いて年代を測定できると判断している。

この判断の正当性は、多くの遺跡についての測定と研究室における実験によって確めなければならない。図－31から分るように、奈良時代では地磁気の偏角がほぼ10° Wである。したがって奈良時代の寺院の版築層の残留磁気の偏角もほぼ10° Wでなくてはならない。これは筆者の判断の正否を決める重要なチェックポイントになる。次に、筆者が期待しているのは、実験に基づく伏角の補正である。色々な種類の粘土について、磁場中加力残留磁気の実験を行い、地磁気、力および水分の三つの要因と残留磁気との相関についてのデータを集積すれば、年代を測定しようとする遺跡の粘土について同様の実験を行い、その結果を集積されたデータとくらべて伏角を補正し、版築当時の地磁気の方向を再現できると考えている。これが実現すれば、測定精度が改善され、年代測定の対象も一般の粘土構造物に拡大されるだろう。末筆になりましたが、試料採取の折にお世話になった出雲市教育委員会の皆様と島根県教育庁文化課の西尾克己主事に御礼を申し上げます。

（島根大学理学部　時枝克安、河本直子、伏見良夫）

註 (1)　神門寺境内廃寺（1985）　出雲市教育委員会

(2)　神門寺境内廃寺第１次発掘調査概報（1983）　出雲市教育委員会

(3)　神門寺境内廃寺第２次発掘調査概報（1984）　出雲市教育委員会

(4)　広岡公夫（1977）第四紀研究　15、200～203

5. ま と め

昭和57～59年の３カ年にわたる寺院確認調査によって、これまで知られていなかった神門寺境内廃寺の新知見がいくつか得られた。しかし、同時に今後解明すべき多くの問題も残っている。

以下、整理して概述してみたい。

① 当初一町四方の寺域で、法起寺式伽藍配置を想定したが、調査の結果、寺域は現神門寺境内の北東部を中心とし、また、伽藍配置についても、基壇は検出されたものの、明らかにすることはできなかった。

② 第７トレンチ、第13トレンチ、第16トレンチ南端部の調査所見から、現神門寺境内は近世初期に拡張整備された可能性が強い。

③ 神門寺庫裡裏の庭園にある礎石は、第19トレンチでの調査の結果、原位置を保ったものであることが明らかになった。

④ 礎石下の基壇は版築されており、知見の限りでは、礎石の中心から北に５ｍ70cm、西に４ｍ20cmが確認できたが、それから先はかなり攪乱されている。瓦積みや石列は確認できなかった。なお、東と南は庭園のため、トレンチを設定することはできなかった。

⑤ 基壇が、金堂に伴うものか、塔かは即断し難いが、礎石は環状溝をもつかなり大きなもので、塔の心礎とも見ることができる。

⑥ 基壇版築粘土層の残留磁気測定では、奈良時代の方向にくらべて偏角がほぼ等しく、当該期の古代寺院である可能性が強いことが指摘された。

⑦ いわゆる水切り瓦は、山陰では神門寺境内廃寺１カ所しか発見されていない。発掘調査によって３種類が確認されたが、山陽との仏教伝播など、今後の問題点として残っている。

⑧ 古代寺院の軒平瓦は、これまで明らかでなかったが、発掘調査によっても厖大な平瓦のなかに一片も見出せなかった。寺町廃寺では沈線をもつ軒平瓦が一片だけ報告されているが、神門寺境内廃寺でも同種の平瓦か、または、平瓦を二枚重ねて軒平瓦とした可能性が強い。

⑨ 神門寺境内廃寺に使用された大量の瓦を供給した瓦窯跡の所在は、これまで知られていないので、将来の課題となる。

⑩ 寺院以前の遺物としては、縄文式土器、弥生式土器、土師器が出土している。

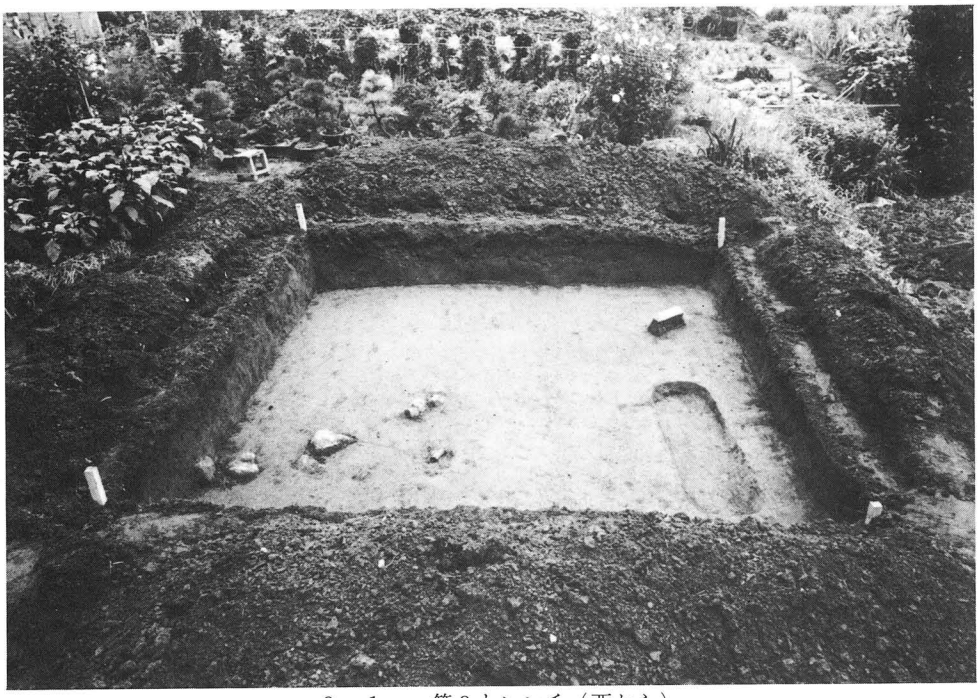
図　　版

1－1　神門寺の航空写真（西から）

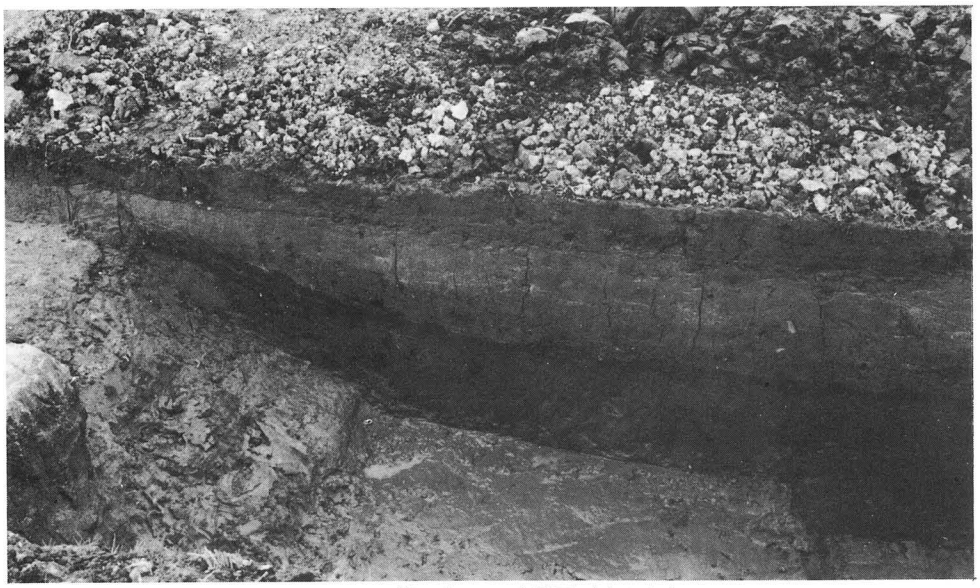
1－2　神　門　寺（南から）

2－1　　第1トレンチ（北から）

2－2　　第10トレンチ（東から）



3－1　　第3トレンチ（西から）



3－2　　第5トレンチ断面（南から）

4－1　　第16トレンチ（南から）

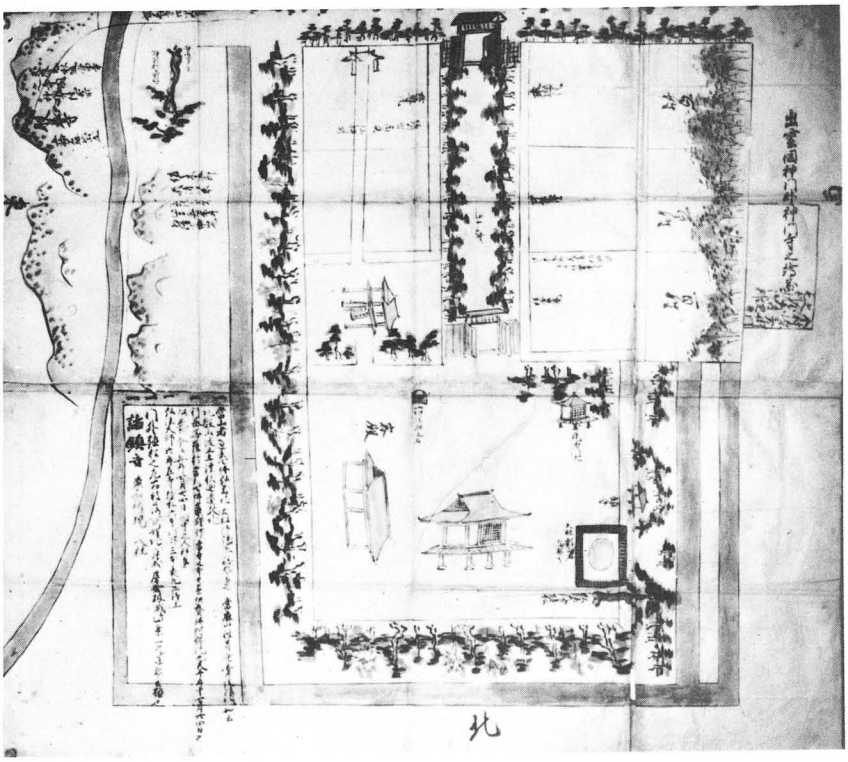
4－2　　第18トレンチ（東から）

5－1　礎石と19トレンチ（南から）

5－2　版築状況（19トレンチ北壁）

5－3　版築状況（19トレンチ東壁）

6－1　第12トレンチ　瓦溜り

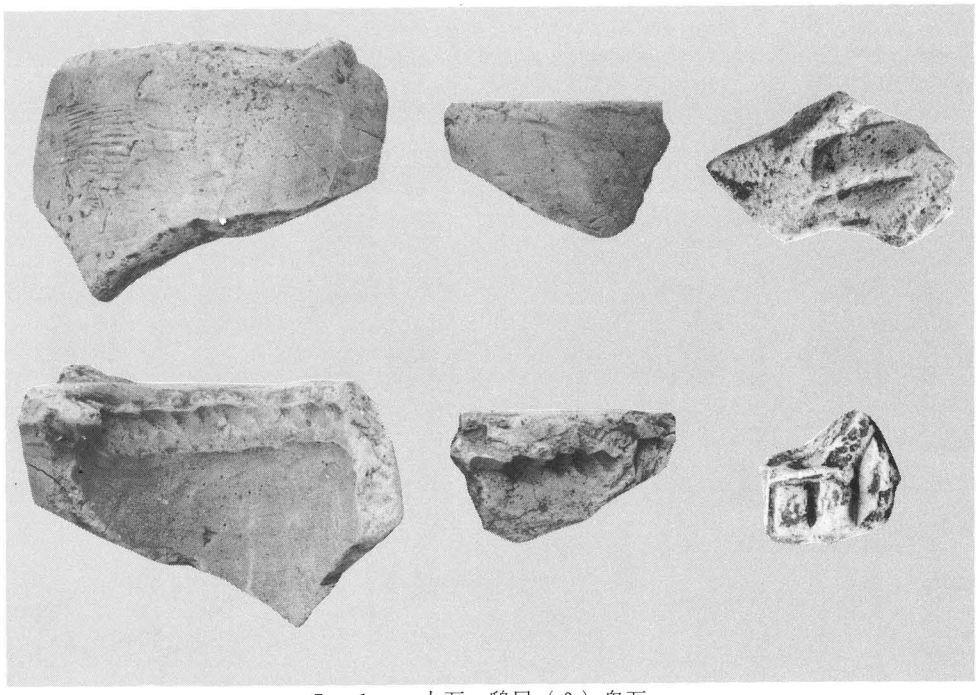


6－2　神門寺之絵図

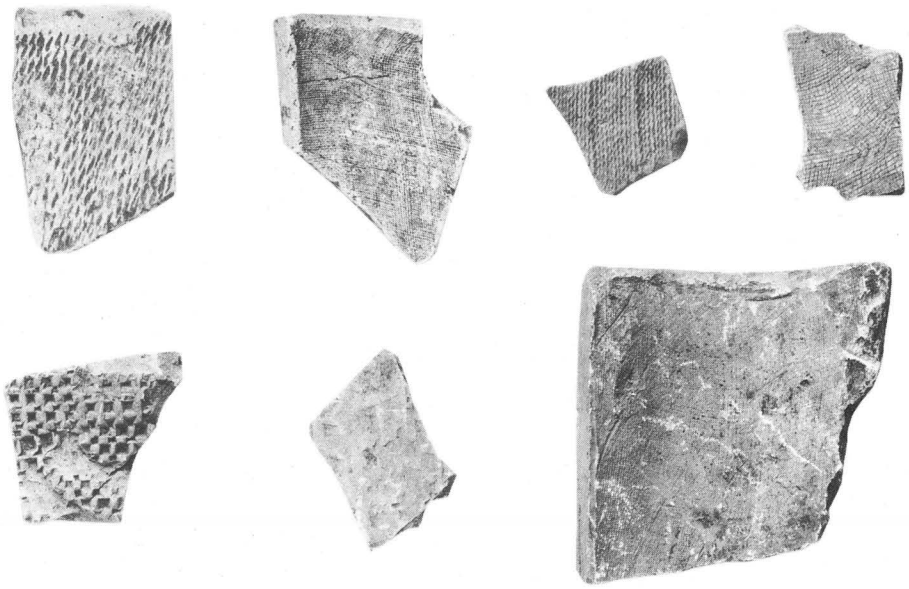
6－1　表採瓦（軒丸瓦、鬼瓦）

6－2　表採瓦（軒丸瓦）

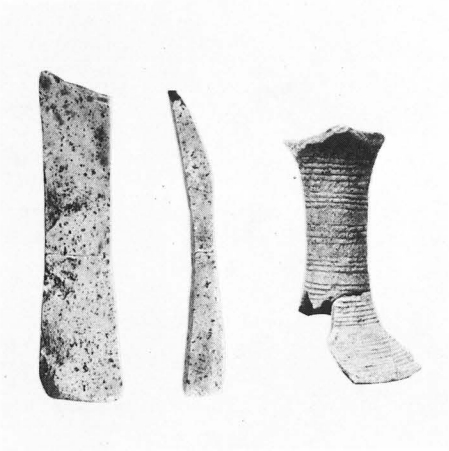
6－3　発掘調査で出土した軒丸瓦



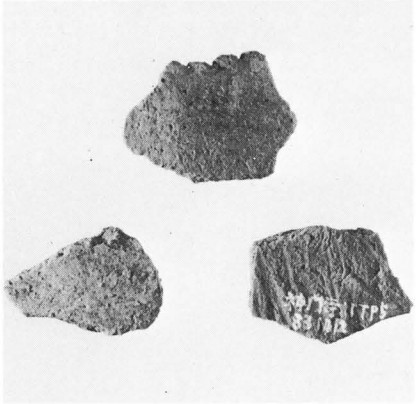
7－1　　丸瓦・鴟尾（？）鬼瓦



7－2　　平　　瓦



8－1　第3トレンチ出土
砥石・弥生式土器



8－2　第11トレンチ出土
縄文式土器

8－3　18トレンチ出土　土　師　器

昭和60年３月15日　印刷
昭和60年３月25日　発行

神門寺境内廃寺

発行　出雲市教育委員会
印刷　株式会社　武永印刷